

# 第1章 鎌倉市の歴史的風致形成の背景

## 1 自然的環境

### (1) 地形・水系

鎌倉市は、一都六県にまたがる関東平野の南部、神奈川県  
の南東部に位置し、多摩丘陵と三浦丘陵との結節点に隣接  
することから、市域の殆どが山稜や台地で占められている。  
この結節点に程近く、市の北東部に位置する大平山（標高  
159m）は、鎌倉市で最も標高が高い山で、南方に位置する  
衣張山（標高 120m）や西方に位置する六国見山（標高 147  
m）に向かって標高 100m程度 of 骨格的な尾根線が延び、さら  
に標高 100mから 50m程度の尾根線が四方に派生しながら  
海岸方面や市街地へと続いている。

平地の少ない鎌倉市において人々は、中世のころより谷  
戸と呼ばれる山稜の谷間を切り開いて平坦地を造成し、そ  
こに生活の場を求めてきた。谷戸は、現代の鎌倉においても  
特徴的な地形の一つであり、閑静な谷戸の奥深くには、古く  
からの社寺や住宅が数多く存在している。

市域の北部を流れる柏尾川沿いと南東部を流れる滑川  
沿いの平地には、鉄道駅を中心とした市街地が広がってい  
る。また、市域を流れる河川の多くは、相模湾に直接流下している。



図1-1 鎌倉市の位置



図1-2 丘陵地のつながり

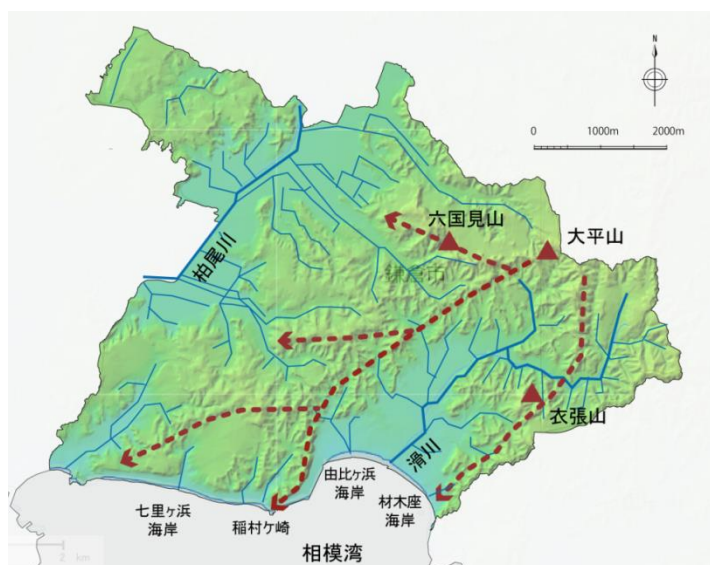


図1-3 鎌倉市の地形・水系

相模湾に面する海岸線のうち、滑川河口に広がる由比ヶ浜海岸・材木座海岸は、海水浴に適した遠浅の砂浜として知られており、その西端にある稲村ヶ崎を境として江の島方面へと延びる七里ヶ浜海岸は、急峻な山稜が海際まで迫り、遠くに富士山を望む風景が浮世絵などにも描かれる神奈川県でも屈指の景勝地である。

## (2) 気候風土・地質・植生

### ア 気候風土

「平成 26 年（2014 年）版 鎌倉の統計」によると、平成 25 年（2013 年）における鎌倉市の年間平均気温は 16.8℃、年間降水量は 1,231.5 mm となっている。気候帯としては、南面する相模灘の影響を受ける海洋性の気候を特徴とし、関東平野の内陸部に比べて夏は涼しく冬は暖かい暖温帯に属する。また、夏には南風、冬には北風が吹く傾向にあり、海岸に近い場所では、年間を通して風通しがよいのも特徴である。

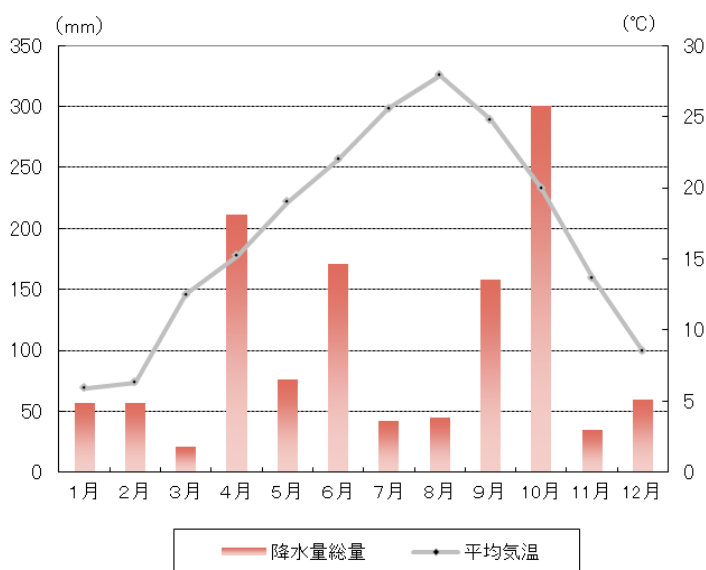


図1-4 平成 25 年の年間気温の変動と年間降水量

### イ 地質・植生

太平洋側の温暖な海洋性の気候を反映した鎌倉市の植生は、常緑広葉樹林域に含まれる。また、市域が三浦半島基部に位置することから、地質的に第三紀の三浦層群と大船以北に見られる関東ローム層により成り立っている。関東地方においては一般に、ローム層を厚く被った洪積台地上にシラカシ林が広く分布するが、第三紀層の堆積岩上に直根性のシラカシは生育できず、尾根筋の乾燥した立地にスダジイ林が、谷筋や沖積地にはタブノキ林が見られる。市内には断続的に樹林地が広がっており、その殆どはクヌギ、コナラ等の二次林とスギ、ヒノキ等の植林地となっている。自然植生では、建長寺、鶴岡八幡宮、妙法寺、安国論寺、長勝寺等の背後の丘陵地の一部にヤブコウジ - スダジイ群集、イノデ - タブノキ群集等が分布している。その他、イロハモミジ - ケヤキ群集、マサキ - トベラ群集、イソギク - ハチジョウススキ群集等も見られる。

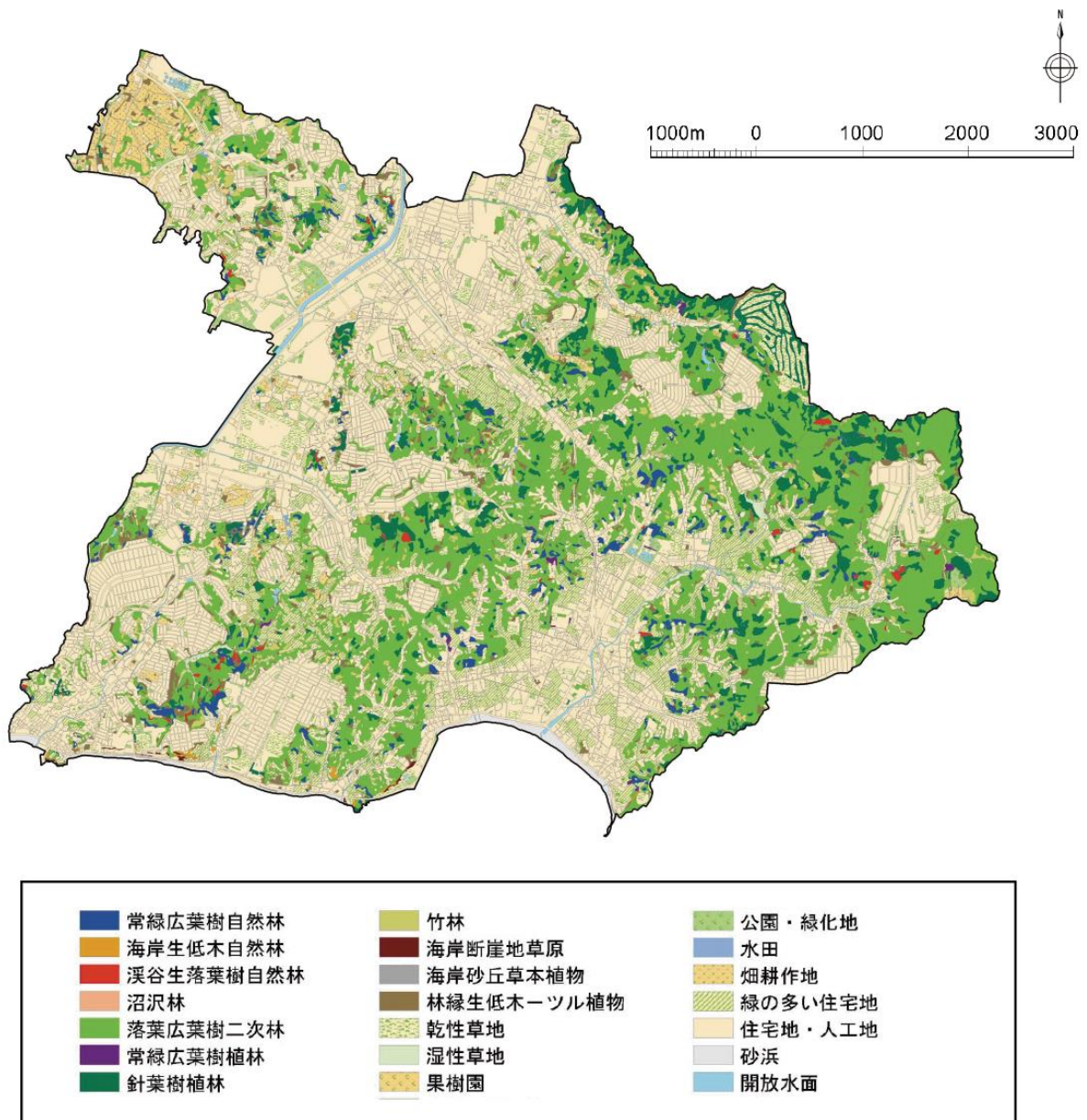


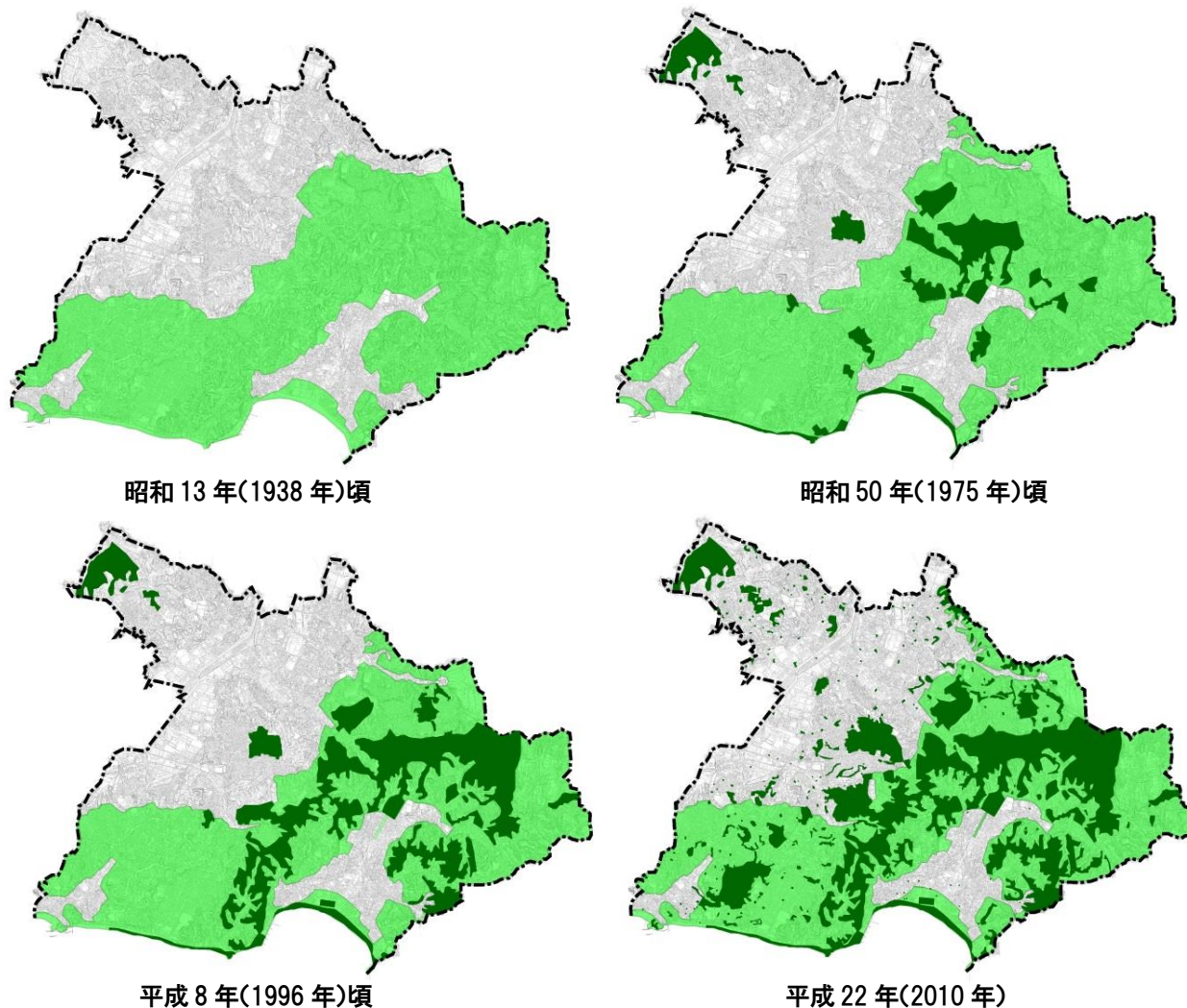
図1-5 鎌倉市の植生



### (3) 緑地等

都心近郊にあって多くの緑が残る鎌倉市は、市域面積の約 42.7% (1,687ha) を樹林地等が占めている。昭和 30 年代後半からの高度経済成長期には、宅地化の波を受けて緑地が急激に減少したが、その後の緑地保全施策の推進や経済社会環境の変化などによって、近年はやや落ち着いた状態にある。このことは、地形図をもとにして図上で計測した市の樹林地面積等の推移にも表れており、昭和 22 年 (1947 年) と昭和 48 年 (1973 年) の樹林地 (森林) 面積を比較した場合、26 年間で約 2,400ha が約 1,600ha まで減少しているが、平成 2 年 (1990 年) と平成 22 年 (2010 年) の 20 年間では約 1,400ha から約 1,286ha へ微減となったものの、大きな変化は見られない。

また、歴史的風土特別保存地区、特別緑地保全地区の指定が進むなど担保性の高い緑の分布も確実に広がっている。



#### ■ 強い規制力を持つ制度

歴史的風土特別保存地区、特別緑地保全地区、生産緑地地区、農用地区域、都市公園 (都市計画決定している区域、または供用している区域) で、一部は規制緑地を持つ緑地と重複

#### ■ 規制力を持つ制度

歴史的風土保存区域、近郊緑地保全区域、風致地区

図1-6 緑地指定等(緑地保全に係る法制度適用)の推移



## 2 社会的環境

### (1) 位置

緑豊かな丘陵と相模湾を臨む美しい海岸線を有する鎌倉市は、神奈川県南東部の三浦半島の基部西側に位置する関東屈指の歴史都市であり、東京駅から約50km（電車で約1時間）、横浜駅から約20km（電車で約25分）の距離にあることから、都内や横浜市内へ通勤・通学する人のベッドタウンとして、また古都の風情を感じることのできる首都圏近郊の観光地としての性格も有している。北は横浜市、西は藤沢市、東は逗子市に接し、周囲35.20km、東西8.75km、南北5.20km、市域の総面積は39.53km<sup>2</sup>となっており、市域南部の沿岸は、遠浅で弓形の砂浜と急峻な山稜が海際まで迫る海岸線で構成され、東西に7kmにわたって延びている。

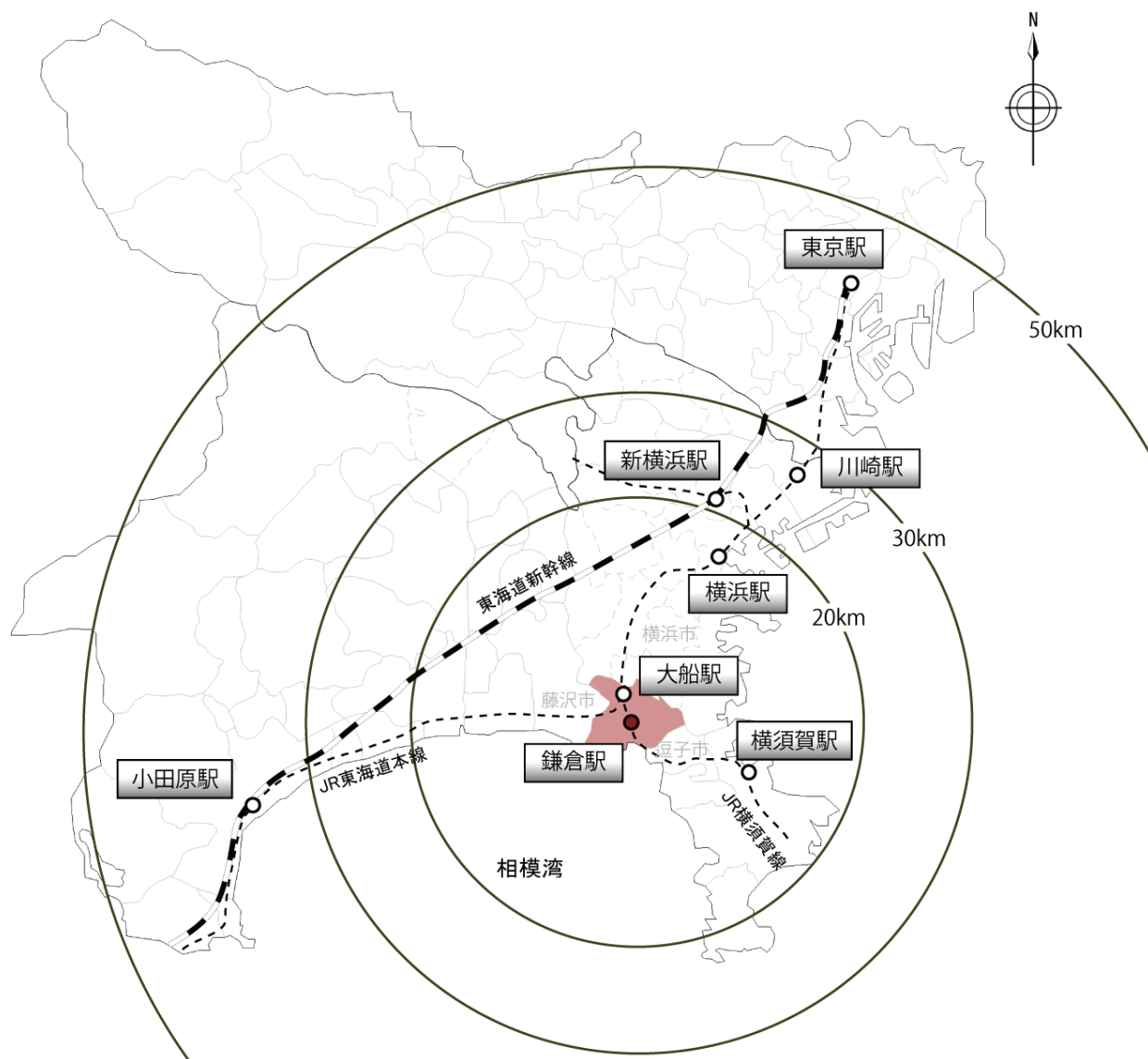


図1-7 鎌倉市の位置

## (2) 都市形成

### ア 変遷

鎌倉市は、昭和14年（1939年）11月3日に鎌倉郡鎌倉町・腰越町の2区域を併せて市制を施行し、その後、昭和23年（1948年）1月1日に深沢村を、同年6月1日には玉縄村を編入していた大船町を合併したことから、現在の五つの行政区域（鎌倉地域、腰越地域、深沢地域、大船地域、玉縄地域）となった。

各地域の特徴としては、歴史文化資源を多く抱え歴史・観光の拠点であり、海浜レクリエーションを楽しむこともできる「鎌倉地域」、漁港周辺に市街地が形成されている「腰越地域」、JR大船工場跡地周辺で進められているまちづくりにより今後新たな地域拠点となることが期待される「深沢地域」、大船駅周辺を中心に工業、商業が集積する「大船地域」、都市近郊農業が盛んな「玉縄地域」となっており、まちの様態はそれぞれ変化に富んでいる。

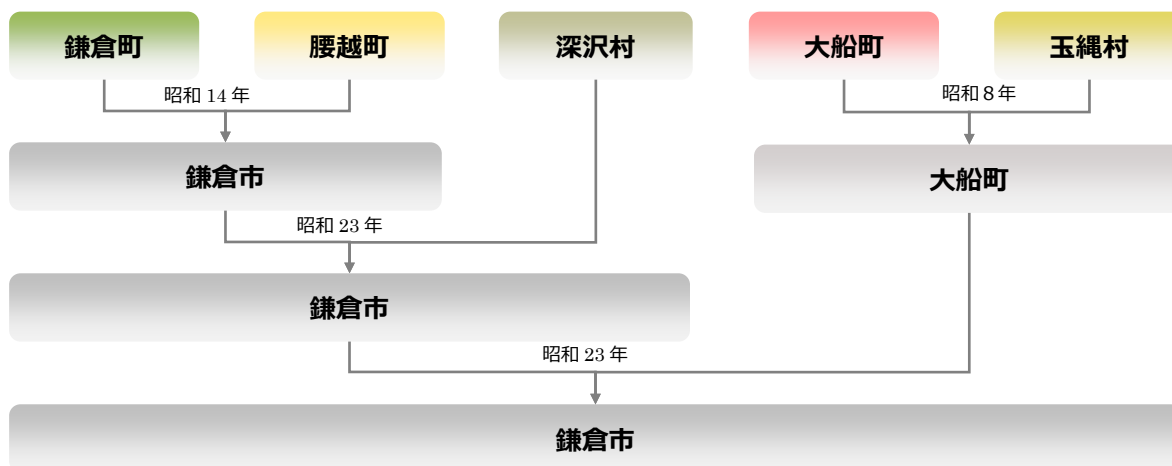


図1-8 鎌倉市域の変遷



図1-9 鎌倉市の地域区分

## イ 交通

鎌倉市の交通体系を見ると、鉄軌道としては、大船駅から藤沢方面に延びる JR 東海道本線、大船・鎌倉駅から横須賀方面へ市域中央部を南北に縦貫する JR 横須賀線、大船駅を起点として横浜方面へ向かう JR 根岸線のほか、鎌倉駅から江ノ島・藤沢駅に至る沿岸部を走る江ノ島電鉄と大船・湘南江の島駅間を結ぶ湘南モノレールがある。また、バス路線は、106 路線あり、湘南京急バス株式会社、神奈川中央交通株式会社、株式会社江ノ電バス横浜の 3 社により運行されている。道路網としては、国道 1 路線、主要地方道 3 路線、一般県道 8 路線が整備されている。都市計画道路の整備率は、平成 25 年 3 月末時点で、約 81% となっており、県平均の約 70% を上回っている（平成 25 年国土交通省都市計画現況調査より）。



図1-10 鎌倉市の交通網



## ウ 土地利用

鎌倉市における平成27年(2015年)1月時点の地目別土地面積を見ると、市域の全体面積3,953haに対して、宅地が約1,531ha、山林が約913ha、原野・雑種地が約222ha、田畑約107haなどとなっており、市域の約4割を宅地が占めている。

市の拠点駅の一つである鎌倉駅の周辺は、商業地を取り囲むように住宅地が広がっている。これは源頼朝が整備した往時の都市構造に沿うものであり、現在の市街地形成に大きく影響している。また、その縁辺の山沿いには、樹枝状に谷戸が多数展開しており、谷戸の内側には寺院や住宅が建ち、自然的環境に寄り添って宗教活動や生活を営んでいる様子が見えらる。一方、もう一つの拠点駅である大船駅の周辺は、駅東側を中心に商業地が集積し、その外縁に住宅地及び工場等の産業用地が広がっている。

また、鎌倉市は市域全体が都市計画区域に指定されており、うち65%が市街化区域となっている。用途地域の構成としては、住居系が市街化区域全体の約86%、商業系が約4.5%、工業系が約9.5%である。

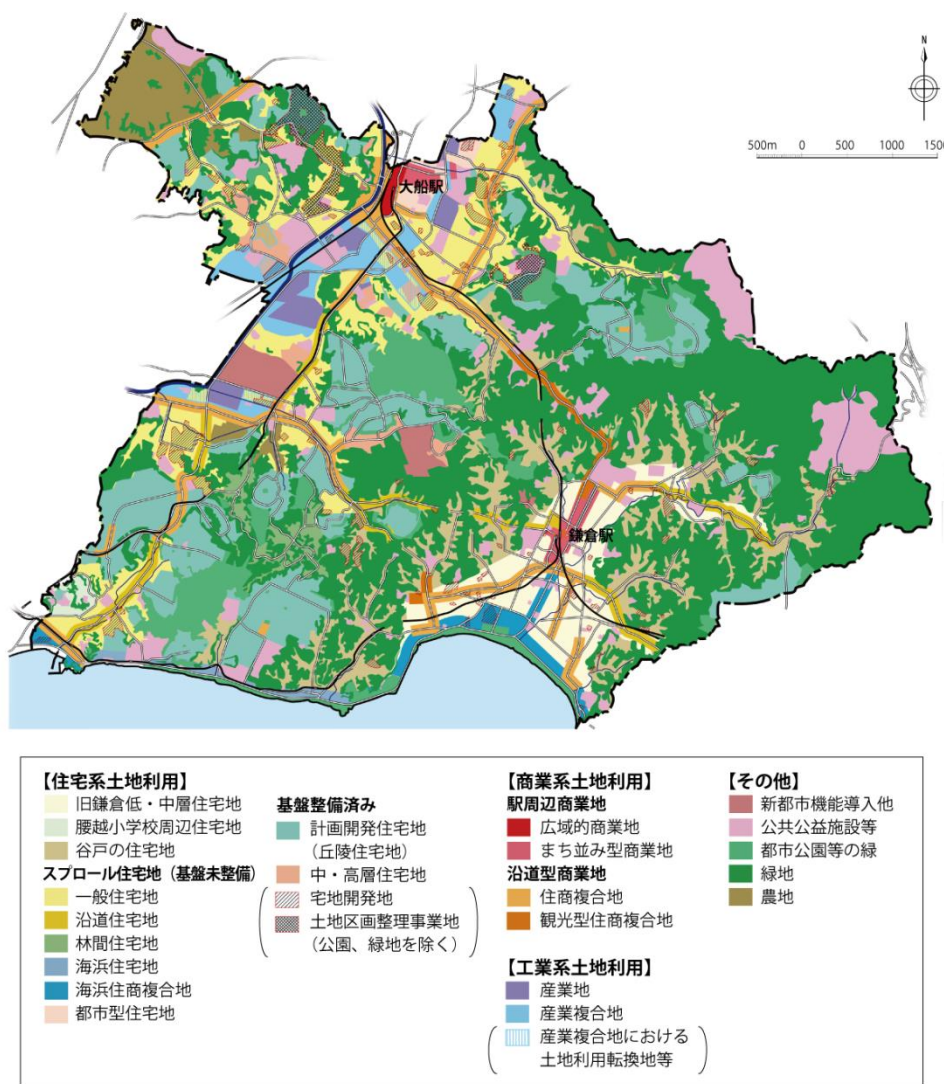


図1-11 土地利用類型

### (3) 人口

鎌倉市の人口は、平成 26 年（2014 年）10 月 1 日現在 173,530 人、世帯数は 73,701 世帯となっている。昭和 30 年代後半からの高度経済成長期に急激に増加し、その後昭和 60 年（1985 年）をピークに一旦減少したが、平成 14 年（2002 年）には再び増加に転じている。過去 10 年の町丁別の人口・世帯の増減を見ると、市内 145 町丁のうち 69 町丁（48%）では人口が、23 町丁（16%）では世帯が増加している。地区別に見ると、鎌倉駅、大船駅周辺で人口が増加している町丁が多くなっている。特に、宅地造成やマンション建設が進んだ場所においては、大幅に人口が増加している。

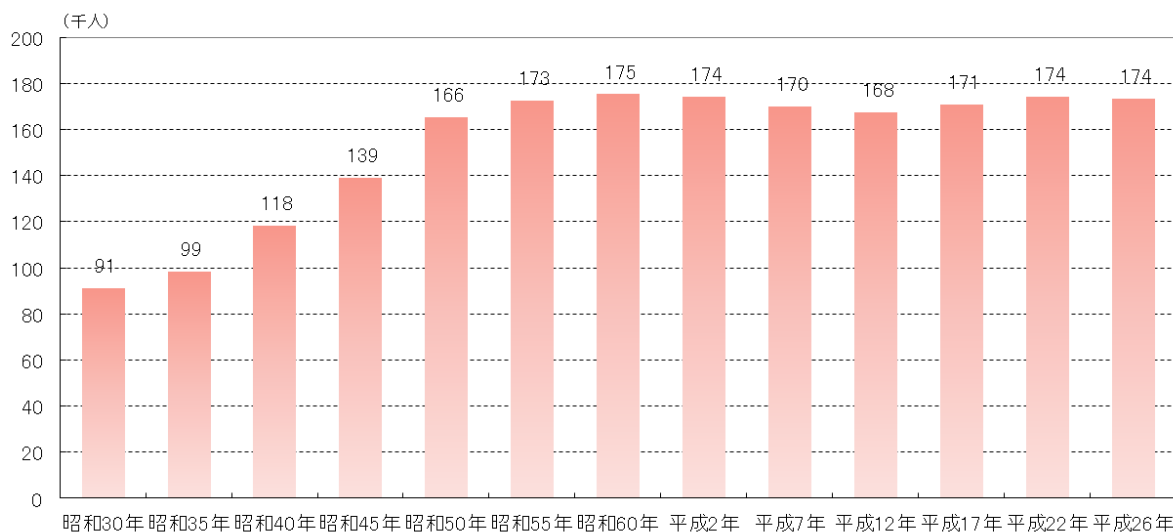


図1-12 人口の推移

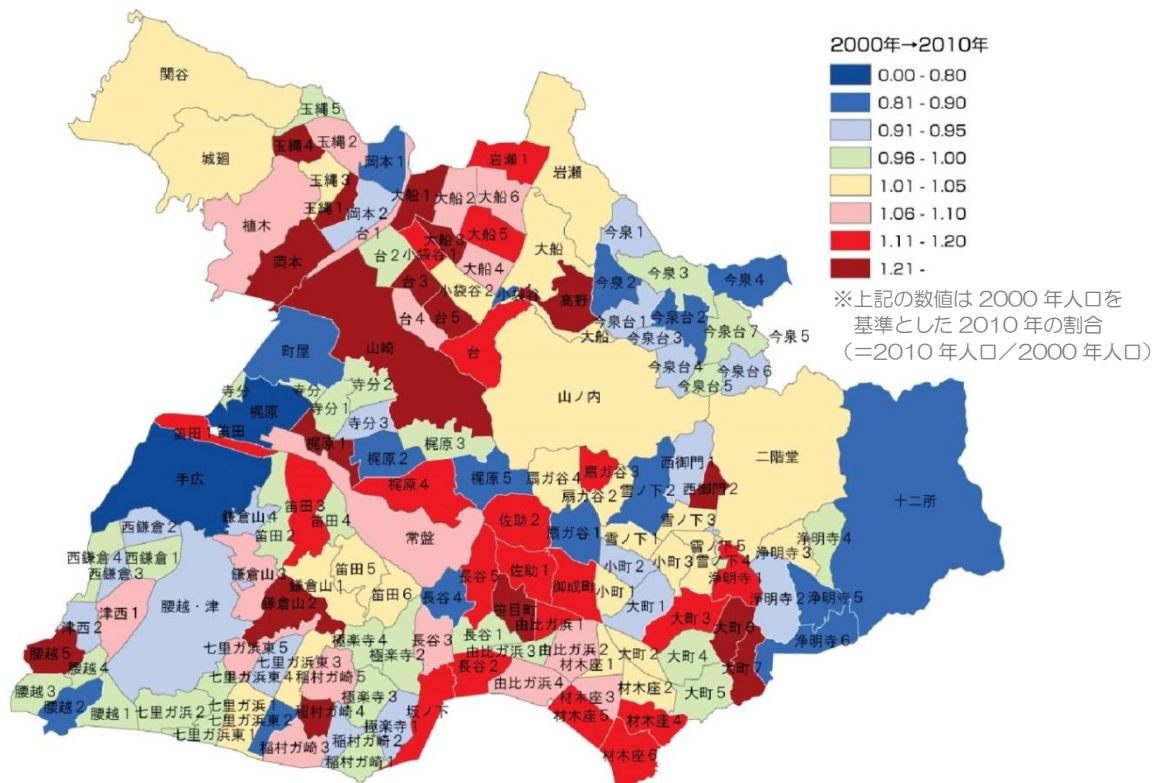


図1-13 町丁別人口の推移

一方、鎌倉市の高齢化率を見ると、平成26年（2014年）1月1日の時点で65歳以上の人口は29.8%となっており、県下19市中3番目に高い水準にある。これは、高度経済成長期に流入した世代が高齢化を迎えているためであり、今後も高齢化は進むものと考えられる。

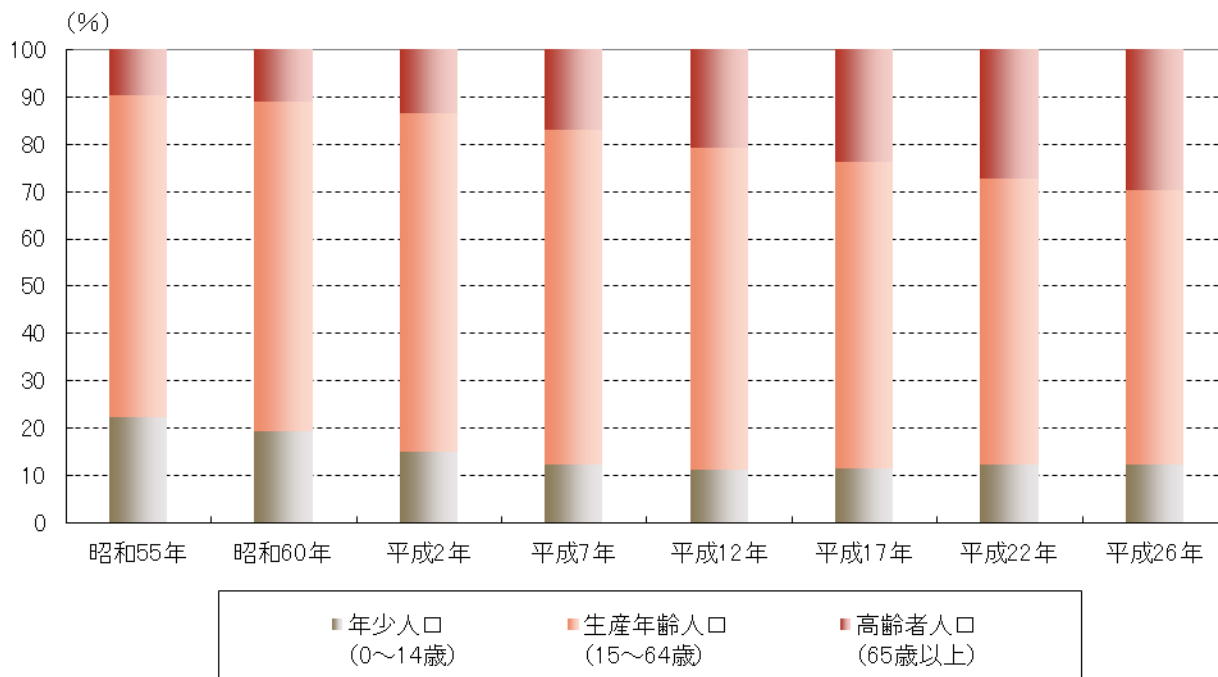


図1-14 年代別人口の推移

#### (4) 観光

近年、約1,800万人から約1,900万人台で推移していた延入込観光客数は、平成25年（2013年）に2,000万人を超えた。これは、年の前半に鎌倉の世界遺産登録への期待の高まりなどからマスメディアにも多く取り上げられたことが来訪動機に結びついたものと考えられるが、年の後半も引き続き観光客数は衰えず、ほぼ毎月前年を上回る数値となった。

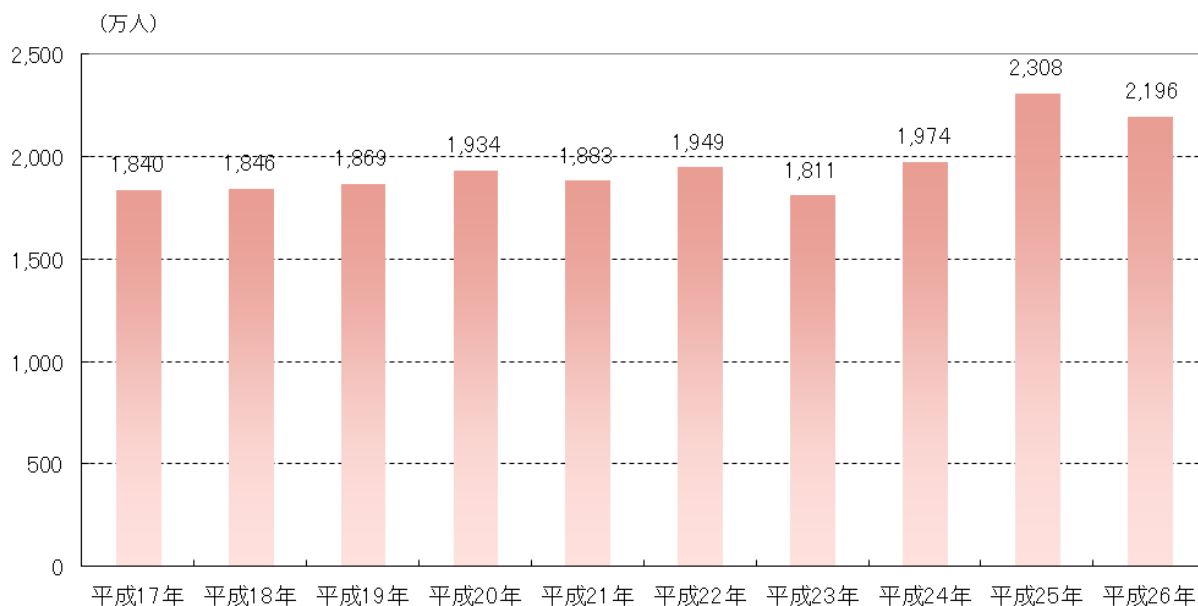


図1-15 入込観光客数の推移



平成 26 年（2014 年）の延入込観光客数は約 2,196 万人で、平成 25 年（2013 年）の約 2,308 万人を 112 万人下回り、前年と比較して約 5%減少した。

鎌倉地域を訪れた観光客に対して年 4 回の街頭アンケート調査を行った結果、その訪問先を見ると、鶴岡八幡宮が最も多く回答者の 3 分の 1 が訪れている。以降、  
こうとくいん 高德院（鎌倉大仏）、はせでら 長谷寺、えんがくじ 円覚寺と続いており、歴史的遺産とされる社寺が上位を占めている。また、年間を通して散策を楽しむことができるハイキングコースや夏に多くの海水浴客が訪れる鎌倉海岸なども鎌倉を代表する観光資源として定着している。



写真1-1 てんえん 天園ハイキングコース

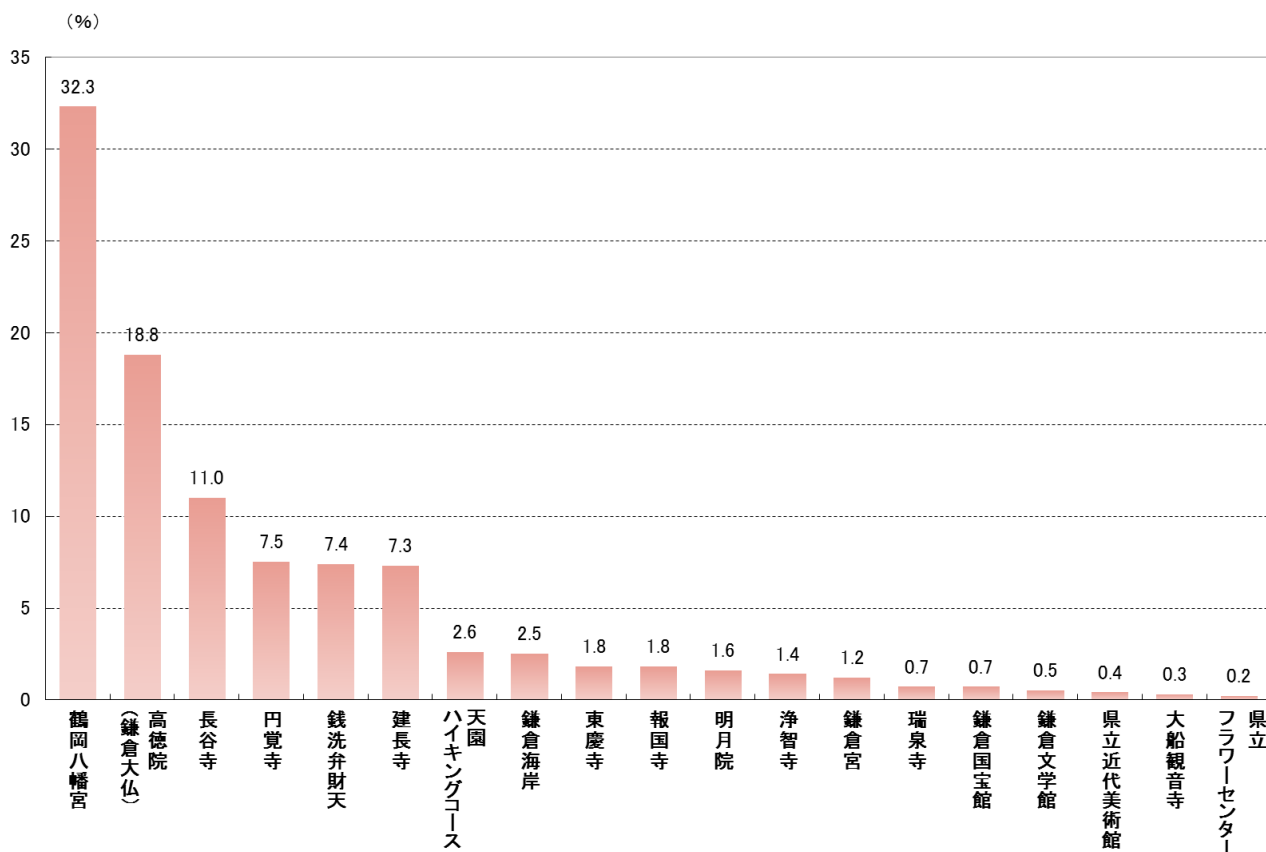


図1-16 街頭アンケート調査結果に基づく訪問先割合

## (5) 産業

鎌倉市における産業別就業人口を見てみると、平成22年（2010年）10月1日時点の男女別15歳以上就業者数72,820人の内訳として、第1次産業（農業・林業・水産業など）が505人、第2次産業（製造業・建設業など）が12,284人、第3次産業（商業・金融業・運輸業・情報通信業・サービス業など第1次・第2次産業以外全部）が56,932人となっている。これらを平成12年（2000年）10月1日時点及び平成17年（2005年）10月1日時点の調査と比較した場合、就業人口の低下とともに、特に第2次産業従事者の割合が徐々に低下していることや、観光地や別荘地として発展してきた歴史も踏まえ、従来から第3次産業人口の割合が大部分を占めていることが分かる。

表1-1 産業別就業人口

	産業別就業人口（各年10月1日現在）					
	平成12年（2000年）		平成17年（2005年）		平成22年（2010年）	
第1次産業人口	468人	0.6%	585人	0.8%	505人	0.7%
第2次産業人口	17,184人	22.6%	14,698人	19.0%	12,284人	16.9%
第3次産業人口	57,474人	75.6%	60,612人	78.3%	56,932人	78.2%
分類不能	945人	1.2%	1,527人	1.9%	3,099人	4.2%
総数	76,071人	100.0%	77,422人	100.0%	72,820人	100.0%

## 3 歴史の変遷

### (1) 古代

鎌倉は、日本列島の東と西を結ぶ水陸交通の要衝であったため、古代から中央政権との関わりが持たれていた。4世紀後半には、現在の逗子市と葉山町の境の稜線上に、畿内の大和政権との係わりを示す前方後円墳が築かれ、8世紀から10世紀にかけては、鎌倉に律令制度の地方行政府である鎌倉郡衙が置かれていた。

11世紀以降は、武家が台頭する中で、房総半島での平忠常の乱や前九年合戦（永承6年（1051年）～康平5年（1062年））及び後三年合戦（永保3年（1083年）～寛治元年（1087年））の奥州での二度の反乱を鎮圧して名声をあげた源氏の拠点となった。康平6年（1063年）には源頼義が鎌倉由比郷（現材木座一丁目）に由比若宮を建て、その子義家は永保元年（1081年）に若宮社を修理したと伝えられる。また、12世紀半ば過ぎには、源義朝が現在の寿福寺付近に館を構えていたとされる。



写真1-2 鎌倉郡衙の建物跡  
（今小路西遺跡）

### (2) 鎌倉時代

#### ア 武家政権発祥の地

鎌倉は、12世紀末に貴族支配による古代社会から武家支配による武家社会への移行という日本史上革命的な変革が起きた舞台であり、本格的な武家政権が発祥した地である。

そして、武家自らが構築・運営した政治支配体制の中で、東アジアにおける活発な人的・物的交流が行われ、現在の伝統的な日本文化の源流の一つである武家文化が生みだされた地でもある。

こうした歴史的な事象は、現代における都市としての鎌倉の出発点を成している。

#### イ 鎌倉幕府の成立

平治の乱後の平治元年（1159年）に伊豆国蛭ヶ小島（現静岡県伊豆の国市）へ配流されていた源義朝の子頼朝は、治承4年（1180年）に以仁王の令旨を受け、平氏打倒の旗を挙げた。頼朝は、石橋山の戦いで一度敗れたものの、現在の東京湾周辺の武家集団を糾合して鎌倉に入り、平氏に対抗する武家政権を樹立した後、直ちに鶴岡八幡若宮に参拝するとともに父義朝の館跡に赴いて、源氏の正統な後継者であることを表明した。



さらに頼朝は、鶴岡八幡宮を武家及び政権の守護神とした宗教政策の柱とするため、鎌倉の中心へ遷すとともに、自らに従った武家との間で、「御恩と奉公」と呼ばれる関係を構築した。これは、土地の権利を財産として保障する「本領安堵」<sup>ほんりょうあんど</sup>と、新しい土地を分け与える「新恩給与」<sup>しんおんきゅうよ</sup>に対し、軍役等の負担を求めるものであった。そしてこの関係性によって結集された武家の軍事力を権力の基盤とした。

着々と勢力を伸ばした頼朝は、寿永2年（1183年）には東日本における自らの支配権を後白河法皇に認めさせ、朝廷の政治を担っていた平氏を滅亡させるとともに、文治元年（1185年）、後白河法皇から独自の支配領域と全国に及ぶ守護・地頭の任命権を獲得した。

その後、文治5年（1189年）に奥州藤原氏を滅し、全国を平定するとともに、建久3年（1192年）には朝廷から征夷大將軍に任ぜられ、頼朝を頂点とする鎌倉幕府は朝廷から独立した政治機構となった。

表1-2 鎌倉幕府における歴代執権

代	氏名	在職年
1	北条時政 <sup>ときまさ</sup>	1203年～1205年
2	北条義時 <sup>よしとき</sup>	1205年～1224年
3	北条泰時（頼時） <sup>やすとき よりとき</sup>	1224年～1242年
4	北条経時 <sup>つねとき</sup>	1242年～1246年
5	北条時頼 <sup>ときより</sup>	1246年～1256年
6	北条長時 <sup>ながとき</sup>	1256年～1264年
7	北条政村 <sup>まさむら</sup>	1264年～1268年
8	北条時宗 <sup>ときむね</sup>	1268年～1284年
9	北条貞時 <sup>さだとき</sup>	1284年～1301年
10	北条師時 <sup>もろとき</sup>	1301年～1311年
11	北条（大仏）宗宣 <sup>おさらぎ むねのぶ</sup>	1311年～1312年
12	北条熙時 <sup>ひろとき</sup>	1312年～1315年
13	北条基時 <sup>もととき</sup>	1315年～1316年
14	北条高時 <sup>たかとき</sup>	1316年～1326年
15	北条（金沢）貞顕 <sup>かねさわ さだあき</sup>	1326年～1326年
16	北条（赤橋）守時 <sup>あかはし もりとき</sup>	1326年～1333年

## ウ 鎌倉幕府の確立

源頼朝直系の源氏将軍が三代で途絶えた後は、頼朝の妻北条政子の実家である北条氏が幕府の実権を握った。北条氏は幕府諸機構の長官を兼ねて幕政を統轄する執権職に就任し、これを代々世襲して政治を主導した。

一方、幕府創始者として武家の統率に絶大な影響力を有した頼朝の血筋が絶えたことを契機に、以前から朝廷の復権をめざしていた後鳥羽上皇が、承久3年（1221年）に倒幕の兵をあげた。しかし、この危機にかえって結束を強めた幕府の軍事力により、朝廷方は鎮圧された。以後、幕府は朝廷に味方した貴族や武士の所領を没収し、有力御家人にその領地を報償として配分したため、鎌倉幕府の全国支配は一層強まった。この実権強化を背景に、第三代執権北条泰時は、貞永元年（1232年）、紛争解決の基準や合議政治の規範とするため、51カ条からなる武家独自の法律、「御成敗式目」を制定した。こうして、鎌倉幕府による武家政権は、政治的な支配権力を確立させた。

## エ 鎌倉幕府によって整備された都市構造

鎌倉は、全国を支配する政権の所在地として幕府により機能的に整備された都市であった。「三方を山に囲まれ、一方が海に開く」という要害性の高い地形を利用し、山稜に囲まれた平地の中心に鶴岡八幡宮を据え、都市の基軸として鶴岡八幡宮から真っ直ぐ海に向かう若宮大路<sup>わかみやおおじ</sup>を造営した。その周囲には六浦路、武蔵大路、横大路の他、若宮大路と並行する今小路、大町大路などの道路網が整備され、また、まちを囲む山稜部には、鎌倉の内外を結ぶ七つの切通<sup>きりどし</sup>（七口）が開削された。さらに、材木座海岸の南東端には、海上交通の拠点として、中国や国内との人的・物的交流の機能を果たした港湾施設の和賀江嶋が建設された。

切通近辺の谷戸<sup>やますそ</sup>や山裾<sup>ごくらくじ</sup>には、建長寺、円覚寺、極楽寺、浄光明寺などの寺院が造営され、交通の要衝としてのみならず、軍事（防衛）的拠点としての重要な役割も果たした。

谷戸を開発し内部に伽藍を配した社寺の境内には、現在でも山の裾を切り落として造成した「切岸<sup>きりぎし</sup>」がその姿を留めていることが多く、鎌倉の社寺景観の特長をよく示している。

このようにして整備された都市構造は、15世紀半ば以降に都市としての機能が衰退した後も変化することなく、近代に入り、都市としての機能が再び成長する際にも踏襲された。



写真1-3 浄光明寺庭園の切岸

三方を取り囲む緑豊かな山稜部を背景に、都市の核となる鶴岡八幡宮と機軸を成す若宮大路、中世以来の道路網、谷戸や山裾に展開する社寺のあり方は、鎌倉の基本構造として生かされ、歴史都市鎌倉を形成する物理的な基盤となっている。

## オ 武家文化の形成と発展

12世紀までの日本文化の担い手は、ほぼ貴族階級に限られていたが、鎌倉で武家が政治権力を確立したことに伴って、武家階級が新たに文化の担い手として加わることとなった。

武家は、神道や浄土思想、宮廷における儀式や装束及び和歌など、従来の日本の「貴族文化」に加え、日常の衣食住や禅宗<sup>ぜんしゅう</sup>と共に移入された詩文学、書道、絵画、印刷、喫茶などの中国の「宋・元文化」を積極的に摂取した。そしてこれらと「勇敢さ」や「潔さ」、自ら土地を開発する領主としての現実的なものの考え方など、武家独自の気質を融合させ、新たな文化を生み出した。それは、芸術、思想、伝統、規範等に止まらず、武家が作り出した政治、経済、軍事に及ぶ権力と支配の構造なども含み、「武家文化」として発展し続けた。

## カ 鎌倉幕府と社寺

鎌倉幕府は、支配の強化を目的に、神道及び仏教を宗教政策の両輪に据えた。その表れの際たるものが、源頼朝による鶴岡八幡宮及び若宮大路の造営である。

武家政権を樹立した頼朝は、鎌倉の地での新しいまちづくりにあたり、鎌倉由比郷にあった由比若宮を戦いの神として崇め、鶴岡八幡宮として現在の場所に遷し、まちの中心に据えるとともに、寿永元年（1182年）には鶴岡八幡宮の参道である若宮大路を鎌倉の中心軸として整備した。鶴岡八幡宮においては、滅亡した平氏の供養のため、文治3年（1187年）に放生会を初めて行い流鏝馬を奉納したが、これは現在も鶴岡八幡宮の最も重要な宗教行事である例大祭において継承されている。

頼朝は、杉本寺や荏柄天神社、勝長寿院や永福寺など社寺の再建や建立を積極的に進めながら宗教政策に取り組んだ。

荏柄天神社については、創建は長治元年（1104年）と伝えられているが、頼朝は新たに社殿を造営し、幕府の鬼門（北東）を鎮護する神として祀ったものである。また、永福寺は文治5年（1189年）に平泉の奥州藤原氏を滅ぼした際の敵方戦死者供養のため、建久3年（1192年）に造営された。

頼朝の死の翌年となる正治2年（1200年）、北条政子は、頼朝の父義朝の館跡に栄西をむかえて寿福寺を建立した。栄西は寿福寺建立後も幕府の庇護を受け、二代将軍頼家の申請により京に建仁寺を建立し、博多の聖福寺を加えた京、鎌倉、博多の三大禅院を拠点に、禅宗興隆の礎を築いた。

その後も鎌倉幕府は、支配と権力のさらなる強化をめざし、神道と禅宗を中核とした仏教を軸とする宗教政策を展開する。

建長4年（1252年）には幕府と民衆の安寧を願う鎮護国家思想に基づく具体的政策として、幕府の強力な関与のもと、鎌倉大仏の鑄造が開始された。実質的に幕府政治を行った北条氏は、13世紀半ばになると、北条時頼による



写真1-4 鶴岡八幡宮



図1-17 永福寺復元CG



建長寺、北条時宗による円覚寺の建立などに見られる禅宗の本格的な導入をはじめ、北条時頼・長時による諸宗兼学の道場としての浄光明寺、北条重時による極楽寺、北条貞時による蒙古再襲来時の戦勝を祈願する覚園寺など、鎌倉の各地に配された自らの館の近辺に数多くの寺院を建立した。

建長寺は、建長5年（1253年）に第五代執権北条時頼が、蘭溪道隆を開山に招き、我が国初の禅宗専門道場として建立したものである。蘭溪道隆が没した後、弘安4年（1281年）、第八代執権北条時宗は、中国の僧である無学祖元を開山として、国土の安康を願うとともに蒙古襲来の文永・弘安の役における戦死者供養の意を込めて円覚寺を建立した。

禅宗の教義は、難解な経典や言語によらず坐禅による以心伝心によって仏教の教えを流布しようとするため、建長寺及び円覚寺を拠点として、既成の宗教に満足していなかった武士たちに幅広く受け入れられ、その後の禅宗の発展に大きく寄与することとなった。また、これらの寺院は、一族の供養の場となったばかりか、武家の精神修養や学問・文化修得の場ともなり、絵画、彫刻、茶などの文化的諸要素も醸成され、武家文化の創出と発展の舞台となった。

鎌倉は、建長寺や円覚寺などの禅宗寺院を核に、国際色豊かな政権都市として大いに発展した。このことは、鎌倉市に隣接する横浜市金沢区所在の称名寺や金沢文庫に大量に伝わる宋・元時代の書物、印刷された漢籍・仏書等の書籍類、陶磁器等の美術工芸品類など、当時の中国製文物が如実に物語っている。このように禅宗と共に移入された詩文学、書道、絵画、印刷、喫茶から日常の衣食住にいたる中国文化全般は、武家文化の主要な要素を構成しながら、鎌倉の寺院を発信源として発展していった。

なお、北条氏は中国に倣って五山の制度を取り入れたが、鎌倉時代には明確に制度化されず、現在馴染まれている「建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺」の順は、室町時代の至徳3年（1386年）に京都五山とともに定められたものである。

一方、平安時代末から鎌倉時代には、臨済宗や曹洞宗といった禅宗をはじめ、法然の浄土宗、親鸞の浄土真宗、一遍の



写真1-5 建長寺



写真1-6 円覚寺



写真1-7 寿福寺



写真1-8 浄智寺



写真1-9 浄妙寺

時宗、日蓮にちれんの日蓮宗ほっけ（法華宗）といった新しい仏教宗派が相次いで誕生していった。これらは後に「鎌倉新仏教」とも呼ばれ、末法の世からの救いを、誰もが理解できるように分かり易く説いていたため、武士や民衆の間に急速に広まっていった。

鎌倉新仏教の開祖のなかでも、鎌倉と深く関わっていたのが日蓮である。日蓮は毎日、若宮大路の東側に並行して走る小町大路に出かけ、いわゆる辻説法つじせっぽうを行い、直接民衆に語りかけようとした。現在、鎌倉の日蓮宗寺院は約 30 箇所を数えるが、多くはこの付近に所在する。

また、鎌倉新仏教の誕生に刺激され、旧仏教の側からも戒律を重視して南都仏教の復興に努める僧侶が現れた。律宗えいそんの叡尊にんしょうと忍性の師弟は、社会事業に尽力したことで知られており、特に忍性は、極楽寺を拠点として律宗の布教活動を行うとともに、貧民救済の慈善事業や道路、橋の建設、井戸の掘削など土木事業にも注力した。こうした功績が幕府にも認められ、後に極楽寺は、和賀



写真1-10 和賀江嶋

江嶋の管理や港に出入りする荷船からの徴税の権利を与えられるなど、鎌倉幕府の中でも重要な役割を担っていた。

多くの宗派にとってこの頃の鎌倉は、新・旧仏教の新興都市として魅力的な開拓地であり、積極的な布教活動が展開されていた。鎌倉の社寺において創出され、発展した文化は、現在も宗教行事や伝統行事の中に確実に息づいている。

## キ 鎌倉幕府の滅亡

我が国は、文永 11 年（1274 年）の文永の役、弘安 4 年（1281 年）の弘安の役と二度にわたり、蒙古の襲来を受けたが、鎌倉幕府はかろうじてこれを撃退した。一方、執権政治は次第に北条氏の嫡流ちやくりゅうによる得宗家とくそうけとそれを支える特定の分家に権力が集中された。そして、引き続いた対蒙古防衛への過重な戦費負担等に苦しんだ各層の不満は、幕府を主宰していた北条氏に集中した。こうした不満が最高潮に達した元弘 3 年（1333 年）、鎌倉は不満分子を集めて幕府に反旗を翻した新田氏・足利氏らに攻撃された。鎌倉方は南西の稲村ヶ崎付近を破られたことにより敗退し、第十四代執権北条高時とうしょうじ以下の北条一族は東勝寺で自害して果て、ここに鎌倉幕府は滅亡した。



写真1-11 稲村ヶ崎



### (3) 室町時代から江戸時代

鎌倉には幕府滅亡後も、室町幕府の東国支配の機関である鎌倉府が置かれ、鎌倉公方足利氏くぼうが、社寺を積極的に保護・復興し、また禅宗に帰依して鎌倉においても京都とは別に五山制度を確立させるなどの施策を講じたため、15世紀半ばまでは中世都市の機能が維持された。

こうした中、康正元年（1455年）以降、足利氏が鎌倉支配を放棄したことなどによって、鎌倉の都市機能は衰退の道をたどり、鎌倉大仏が露座となるなど社寺も徐々に荒廃したが、鎌倉幕府のもとで創建された社寺は、その後も存続し、戦国大名後北条氏による鶴岡八幡宮の修造や太平寺仏殿たいへいじを移して円覚寺舍利殿しやりでんの復興等を行うなど、その庇護のもと命脈を保っていた。

鶴岡八幡宮の修造に関わった北条氏綱は、永正9年（1512年）に小田原城の支城として玉縄城たまなげを築いた北条早雲そうんの嫡男であり、以後、氏綱の三男である為昌ためまさ、その子綱成つなしげなど5代にわたって後北条氏が玉縄城を治めていた。

慶長8年（1603年）、江戸に幕府を開いた徳川家康は、鎌倉を武家政権発祥の聖地として重視し、主要な社寺の復興を行ったが、これを機に、江戸幕府等の関与による鎌倉の社寺の修造が継続的に行われた。



図1-18 相州鎌倉之図

元和8年（1622年）鶴岡八幡宮の上宮・撰社若宮等の造替では、旧若宮社殿が荏柄天神社本殿として移築され、寛文8年（1668年）には鶴岡八幡宮大鳥居が石製に替えられた。その後も社殿の修造が続けられ、上宮は文政11年（1828年）に再建され、現在の形が整えられた。

江戸幕府は建長寺の復興にも尽力し、正保3年（1646年）に二代将軍の正室の霊廟を芝増上寺から移して仏殿とするなどした。一方、民衆の寄進による復興も行われ、建長寺では宝暦5年（1755年）に山門、文化11年（1814年）に法堂が再建され、現在に伝えられている。また、元禄16年（1703年）の大地震により像身が傾いていた鎌倉大仏にいたっては、民衆の寄進などによって修復が行われ、高德院として復興を遂げている。

一方、江戸時代の初期には、主に武家や文人たちが信仰のため、あるいは文学や歴史に触れるため、社寺や景勝地等の名所を訪れるようになった。江戸時代中期以降は、経済的に台頭してきた江戸の庶民階級によって、信仰（参詣）と遊興（旅行）を兼ねた遊山の対象として各地の名所を巡る旅が広まった。この風潮を助長したのが名所記や名所図会といった旅行案内書の刊行で、鎌倉は江ノ島、大山、金沢（現横浜市金沢区）と並ぶ名所として広く江戸の人々に紹介された。

この頃から、鎌倉は源頼朝ゆかりの古都、鎌倉時代以来の多くの社寺がある名所として遊山の対象となり、多くの遊山客が訪れる観光地となった。このことは、東京から直線距離で約50km、電車で約1時間の距離にあり、年間約2,000万人を超える観光客が訪れる現在の姿と重なり、都心近郊の一大観光地としての始まりを示している。

なお、幕末期においては、異国船の来航に備えて鎌倉も幕府の海岸防備の対象地となり、井伊家彦根藩や毛利家長州藩によって砲台が築かれた他、吉田松陰、坂本龍馬、河井継之助など幕末維新史に登場する人物たちも足跡を記している。

## (4) 近・現代

### ア 近代別荘文化の開花

明治元年（1868年）、江戸幕府を倒して明治政府が成立し、ここに鎌倉時代以来の武家支配・武家社会は終焉を迎えた。日本はこれ以降、明治政府による近代化の道を歩むことになる。

明治元年（1868年）に神仏分離令が出されると、それまで混合されていた神道と仏教を分けることとなり、神社からは仏像などが、寺院からは神社関係のものが取り除かれ、鶴岡八幡宮では、薬師堂、多宝塔、仁王門など境内にある仏教関係の建物がことごとく破壊されていった。また、時を同じくして起きた「廃仏毀釈運動」により、鎌倉に所在していた貴重な文化財の多くは、この頃に失われ、鎌倉の社寺も経済的基盤を失って一時荒廃した。



一方、明治中期以降の鎌倉は、海水浴等の保養地・観光地としても注目され、都市が再生されていくことになる。

東京医学校（現東京大学医学部）に招かれ、明治9年（1876年）に来日したエルウィン・ベルツは、予防医学の観点から「保養の思想」を普及させたドイツ人医師である。この頃、同校で校長を務めていた長與専ながよせん斎が鎌倉の海浜部を保養地として推奨し、これをきっかけとして、明治20年（1887年）には由比ガ浜に海浜のサナトリウムである海濱院かいひんいんが開設された。

こうした傾向に拍車をかけたのが、明治20年（1887年）の東海道線の開通、明治22年（1889年）の横須賀線の開通など交通インフラが整備されたことによるものであり、都心部からの利便性が確保されたことから、華族、政界人、財界人、官僚、軍人などが別荘として、また定住型の住宅としても利用できる建物を持つようになった。こうして鎌倉には、最盛期に70を超える別荘が建てられるなど、別荘地、保養地として近代都市の形成が進んでいった。

鎌倉が別荘地であったのは、明治20年代から大正12年（1923年）の関東大震災まで、長く見ても昭和20年（1945年）の敗戦までである。戦後の鎌倉は、首都圏の拡大、交通網の発達により、別荘地から住宅地、観光都市、工業都市へとその地域的性格を変えていった。

## イ 古都への憧憬どうけい

大正12年（1923年）に関東大震災が発生し、鎌倉は地震や津波によって多くの神社や寺院が倒壊するなど、大きな被害を受けたが、ただちに復旧の措置がとられた。

昭和3年（1928年）には震災からの復興の中で、鎌倉の社寺が保有する文化財を地震や火災から保護するための施設として、市民や鎌倉同人会の寄附により資金の大半を賄った鎌倉国宝館が建設された。

鎌倉同人会は、大正4年（1915年）、鎌倉に別荘や住宅を構えた外交官等によって設立された社会貢献団体であり、鎌倉国宝館の建設以外にも



写真1-12 鎌倉駅に向かう列車(明治時代)



写真1-13 若宮大路(明治時代)



写真1-14 関東大震災の様子

鎌倉駅舎改築の要請、若宮大路の松並木の保護、段葛<sup>だんかずら</sup>の改修・植樹、街灯・公衆便所の設置、社寺・史跡等の保護補修<sup>けんび</sup>・建碑・案内、郵便局舎の建設、また関東大震災の際には救護薬品の寄贈や復興の援助を行うなど、創立当初から昭和にかけて積極的な事業を展開した。現在も鎌倉同人会は、創立の趣旨を受け継ぎ、歴史講座、映画会、石碑の建立・保全などの文化活動を展開している。

また、この時期、市内の歴史的由緒の地には鎌倉町青年団<sup>けんしょうひ</sup>によって顕彰碑が盛んに建立され、鎌倉の歴史的遺産の啓発が行われた。この顕彰碑は、現在も80基以上がまちのいたる所に残されており、市民による文化財保護・啓発活動の一端を表している。

明治時代以降、多くの文人墨客<sup>ぶんじんぼっかく</sup>が中世以来育まれた古都の風情を慕い、鎌倉に住まうようになったが、東京の出版社からのアクセスも確保されたことで、より多くの文学者が住み始め、活発な文芸活動が展開されるようになった。関東大震災以降は、壊滅的な被害を受けた東京から文学者の一部が鎌倉に移住して文壇を形成し、彼らは鎌倉文士と呼ばれるようになった。

戦前から戦後にかけては、芥川龍之介、久米正雄、高見順、川端康成、大佛次郎<sup>おさらぎじろう</sup>、今日出海<sup>こんひで</sup>など、多数の鎌倉文士が活躍し、盛んな文筆活動の中で鎌倉を舞台とする文学作品も創作された。彼ら鎌倉文士の精神及び活動は、現在も「鎌倉ペンクラブ」に引き継がれ、新しい世代の文学者たちが集っている。

第二次世界大戦では、鎌倉は京都・奈良と共に戦災から免れた。昭和21年(1946年)には、戦後復興の過程で文人・学者等が集まり、市民大学「鎌倉市民アカデミア」が開校された。鎌倉市民アカデミアは、戦後復興と学芸の振興を目的に、当初は大学設立を目指したものの、資産や運営資金の不足から正規の大学としては認められず、創立からわずか4年半で閉校せざるを得なかった。しかし、三枝博音<sup>さいぐさひろと</sup>などの哲学者の他、宇野重吉、高見順などが教鞭をとり活動が展開された。これも、鎌倉に集った文化人及び市民の学芸活動を象徴している。

文芸活動に関連して、戦後の鎌倉は日本映画界でも重要な地位を占めており、松竹大船撮影所における小津安二郎監督の作品は、日本映画に大きな影響を与えるとともに、海外からも高い評価を得ている。こうした流れを汲み、現在も鎌倉を舞台とするテレビドラマ等が多く制作されており、鎌倉において今も続く文芸活動の一端を示している。



写真1-15 鎌倉国宝館(開設当時)



写真1-16 鎌倉国宝館(現在)

## ウ 市民活動と鎌倉のまちづくり

戦後復興期の最中である昭和 26 年(1951 年)に設立された「鎌倉三日会」は、市政に直接関与する市長や議員等に会員資格を与えないことを基本的性格として、市の財政、物価、保健衛生、交通通信、観光などの諸問題について、たびたび市に具申・勧告を行った。また、この会の機関誌を発行するために発足した「鎌倉市民社」では、活動の中心となった原実はらみのるによって鎌倉の自然について語る座談会なども開かれ、これをきっかけとして創設された「鎌倉の自然を守る会」が、数年後に起きる御谷騒動にも加わることとなる。

昭和 39 年(1964 年)、鎌倉の中心である鶴岡八幡宮裏山の御谷に宅地造成計画が持ち上がると、計画を知った一般市民、学者、文化人、僧侶などがこれに反対する署名運動や募金活動を活発に展開し、約 1 年間に及ぶ地域ぐるみの開発反対、歴史的風土の保存運動が実を結び、事業者が計画を断念するに至った。この時設立された「財団法人鎌倉風致保存会(現公益財団法人鎌倉風致保存会。以下「鎌倉風致保存会」という。)」が市民等からの寄附金をもとに宅地造成予定地



写真1-17 現在の御谷

の一部の買収を行ったことで、御谷騒動は終息を迎えた。この一連の運動はその後、同様の開発計画を抱えた京都、奈良との連携を生み、昭和 41 年(1966 年)には古都保存法が制定された。

中世の歴史的遺産とともに、古都の緑を守るという鎌倉市民の意識は、御谷騒動から 50 年以上経った今でも非常に高く、市内では鎌倉風致保存会をはじめ、多くの団体が継続的な活動を行っており、歴史的環境と自然的環境が調和した良好な市街地が保たれている。



## (5) 歴史に関連した主な人物

<p>源頼朝（みなもとのよりとも）</p>  <p>写真1-18 源頼朝像</p>	<p>久安3年（1147年）～正治元年（1199年）</p> <p>鎌倉幕府初代将軍。東国武士の支援を得て鎌倉を本拠とし、治承4年（1180年）平氏軍を富士川に破り、寿永2年（1183年）に東国支配権を認める宣旨を朝廷から得る。文治元年（1185年）には弟の義経らを西上させ壇ノ浦で平氏を討滅。同年、守護・地頭の任命権を獲得する。文治5年（1189年）には奥州藤原氏を滅して全国を平定。建久3年（1192年）に征夷大将軍に任ぜられた。</p>
<p>栄西（えいさい・ようさい）</p>  <p>写真1-19 栄西禅師頂相</p>	<p>永治元年（1141年）～建保3年（1215年）</p> <p>鎌倉時代初期の僧。備中の出身。葉上房・千光国師と号す。比叡山で天台の教義を学び、二度入宋し、臨濟禅を伝え帰る。幕府の帰依をうけ鎌倉に寿福寺を、京に建仁寺を創建して天台・真言・禅の三宗兼学の道場とし、「興禅護国論」<sup>こうぜん ごこくろん</sup>を著して禅宗興隆に寄与した。また、茶を宋より移入し「喫茶養生記」<sup>きっさようじょうき</sup>を著した。</p>
<p>北条政子（ほうじょうまさこ）</p>  <p>写真1-20 北条政子坐像</p>	<p>保元2年（1157年）～嘉禄元年（1225年）</p> <p>頼朝の妻。初代執権北条時政の娘。二代将軍頼家・三代将軍実朝<sup>さねとも</sup>の母。頼朝の死後は父時政・弟義時とともに幕政に参与。実朝の死後、京都から九条頼経<sup>くじょうよりつね</sup>を四代将軍に迎え、自ら後見として幕政を裁断したので尼将軍と称された。</p>
<p>北条時頼（ほうじょうときよ り）</p>  <p>写真1-21 北条時頼坐像</p>	<p>安貞元年（1227年）～弘長3年（1263年）</p> <p>鎌倉幕府第五代執権。開幕以来の雄族三浦氏を滅ぼし、実権を確立して専制化を強めた。社寺の保護にも篤く、特に禅宗へ関心を寄せ、蘭溪道隆を迎えて日本最初の禅宗専門道場・建長寺を開くなどした。質素儉約を旨として御家人や民衆の保護に努め、出家して執権職を辞した後も、北条家の得宗として政治の実権を握った。</p>



<p>蘭溪道隆（らんけいどうりゅう）</p>  <p>写真1-22 蘭溪道隆像</p>	<p>建保元年（1213年）～弘安元年（1278年）</p> <p>鎌倉時代中期の中国から渡来した禅僧。寛元4年（1246年）に来日し、北条時頼の帰依をうけて鎌倉の建長寺開山となり、中国の南宋五山に倣った禅院経営を行い、我が国における禅宗興隆に大いに寄与した。その法流を大覚派という。書をよくした。</p>
<p>日蓮（にちれん）</p>  <p>写真1-23 日蓮聖人像</p>	<p>貞応元年（1222年）～弘安5年（1282年）</p> <p>鎌倉時代の僧。日蓮宗の開祖。安房小湊の出身。12歳で仏門に入り、諸宗を比叡山延暦寺他各地で学ぶ。「法華経」によってのみ国家の平安があると悟り、建長5年（1253年）日蓮宗を開き、小町大路などで辻説法を行って他宗を激しく攻撃した。「立正安国論」を幕府に献じ国難を予言したが受け入れられず、伊豆に配流される。赦免後も幕府・諸宗批判を続けたため腰越龍ノ口刑場で処刑されかけるが、処刑を免れ、佐渡に流された。その後、許されて甲斐身延山に隠棲。著「開目鈔」、「観心本尊鈔」など。</p>
<p>無学祖元（むがくそげん）</p>  <p>写真1-24 木造無学祖元坐像</p>	<p>嘉禄2年（1226年）～弘安9年（1286年）</p> <p>鎌倉時代、中国から渡来した禅僧。無学派の祖。南宋、明州の出身。執権北条時宗の招きにより弘安2年（1279年）来日、建長寺に住した。のち円覚寺開山。時宗をはじめ鎌倉武士の帰依厚く、弘安の役前後の政策に影響を与えた。</p>
<p>忍性（にんしょう）</p>  <p>写真1-25 良観房忍性坐像</p>	<p>建保5年（1217年）～嘉元元年（1303年）</p> <p>鎌倉末期の律宗の僧。大和の出身。叡尊・覚盛に師事。鎌倉に光泉寺・極楽寺を開く。道路や橋梁を設けたり、各地に悲田院や施薬院を建てるなど社会福祉事業に貢献した。</p>

徳川光圀（とくがわみつくに）



写真1-26 水戸光圀公之肖像

寛永5年（1628年）～元禄13年（1701年）  
水戸藩第二代藩主。寛文元年（1661年）に水戸藩主となって以来、貧民救済、産業振興などの善政を行い、名君と仰がれた。全国から学者を招き自ら監修にあたった「大日本史」は、水戸藩だけでなく近世日本の文化に大きな影響を与えた。延宝2年（1674年）には鎌倉などの名所旧跡を巡覧し「鎌倉日記」をまとめ、さらに家臣を鎌倉に遣わして「新編鎌倉志」を完成させた。「水戸黄門」の名で現在も親しまれる。

長與専齋（ながよせんさい）



写真1-27 長與専齋

天保9年（1838年）～明治35年（1902年）  
医者。肥前の出身。号は松香。緒方洪庵に師事し、さらに長崎で西洋医学を学ぶ。岩倉遣欧使節に随行し、帰国後東京医学校校長・内務省衛生局長を歴任。日本の医事衛生制度の基礎をつくった。鎌倉海濱院の創設にあたった。

エルウィン・ベルツ  
(Erwin Baelz)

写真1-28 エルウィン・ベルツ胸像

1849年（嘉永2年）～1913年（大正2年）  
ドイツ人医師。ベルツはライプチヒ大学講師の職をなげうって明治9年（1876年）に来日し、現在の東京大学医学部の前身である東京医学校で教鞭をとった。公衆衛生面では日本の防疫事業の基礎を築くために尽力した。近代日本の黎明期に西洋医学を導入した指導者の一人であり、数多くの優れた日本人医学者を育てた。

久米正雄（くめまさお）



写真1-29 久米正雄

明治24年（1891年）～昭和27年（1952年）  
小説家、劇作家、俳人。長野県生まれ。東京帝国大学卒業。在学中の大正3年（1914年）、芥川龍之介、菊池寛らと第三次「新思潮」を創刊。芥川とともに夏目漱石の門下生となる。小説「父の死」、戯曲「阿武隈心中」等を発表して注目された。漱石の娘への失恋体験を描いた「破船」、「墓参」などを次々刊行、流行作家となる。また早くから河東碧梧桐門下の俳人として知られ、号は三汀。句集に「牧歌」などがある。大正14年（1925年）から没年まで鎌倉に住み、鎌倉ペンクラブ結成に尽力した。

川端康成（かわばたやすなり）



写真1-30 川端康成

明治 32 年（1899 年）～昭和 47 年（1972 年）  
 小説家。大阪府の出身。東京帝国大学在学中に文壇に出る。横光利一らと「文芸時代」を創刊し、新感覚派の代表作家となる。著作には「伊豆の踊子」、「雪国」のほか、鎌倉が舞台の「千羽鶴」、「山の音」などがある。戦後は日本ペンクラブ会長も務めた。昭和 43 年（1968 年）日本人として初のノーベル文学賞を受賞して「美しい日本の私」を書いた。昭和 10 年浄明寺に転入後、二階堂へ転居し、昭和 21 年（1946 年）から没年まで長谷に居住。鎌倉ペンクラブの活動にも尽力した。鎌倉市名誉市民。

大佛次郎（おさらぎじろう）



写真1-31 大佛次郎

明治 30 年（1897 年）～昭和 48 年（1973 年）  
 小説家。横浜生まれ。東京帝国大学卒業。筆名は長谷の大仏裏に住んだことに由来する。大正 13 年（1924 年）に「鞍馬天狗」を發表、以後「照る日くもる日」、「赤穂浪士」などの時代小説を書き大衆文学に新境地を開いた。「霧笛」、「帰郷」、「宗方姉妹」などの現代小説、「ドレフェス事件」、「パリ燃ゆ」、絶筆となった「天皇の世紀」などの史伝と幅広いジャンルで活躍。大正 10 年（1921 年）大学卒業後長谷に住み、約 1 年鎌倉高等女学校（現鎌倉女学院高等学校）の教師も勤めた。一時期材木座にも住む。昭和 4 年（1929 年）から没年まで雪ノ下に居住。財団法人鎌倉風致保存会（現公益財団法人鎌倉風致保存会）設立にも貢献した。

菅原通済（すがはらつうさい）



写真1-32 菅原通済

明治 27 年（1894 年）～昭和 56 年（1981 年）  
 実業家。東京の出身。大船～片瀬間に日本初の自動車専用道路をつくり、江ノ島電気鉄道等の社長をつとめる。戦後、民主党の結成から芦田均内閣の成立までを支援した。また麻薬追放運動などにも尽力し、「麻薬天国ニッポン」等多数の著書を残している。多彩な趣味人でもあり、その古美術収集品は常盤山文庫として知られる。

## 4 文化財と文化

鎌倉の歴史は、考古学的な所見及び一部文献資料によると、原始・古代までさかのぼるが、鎌倉の文化財と文化を述べる上で基礎となるのは、主に源頼朝が鎌倉入りした中世以降の歴史である。

鎌倉における文化財と文化の特徴は、第一に鎌倉幕府以降の武家政権による盛んな社寺の造営に由来する有形・無形の文化財が多数存在すること、第二に、明治時代以降、特に横須賀線開通以降の別荘地化が進んだことにより、新たな文化が創出され、別荘建築などの有形文化財及び別荘文化に由来する風俗・習慣が豊富に存在すること、第三に、武家政権の所在地であったため中世都市の埋蔵文化財が豊富であるということが挙げられる。

これらの文化財は、鎌倉地域を中心として市内各所に分布しており、現在の鎌倉のまちの重要な要素となっている。

### (1) 鎌倉の文化財

#### ア 鎌倉の文化財の種類・数

鎌倉市における文化財の数は、昭和60年(1985年)から昭和62年(1987年)にかけて鎌倉市教育委員会が実施した悉皆調査により、有形文化財(建造物、書跡、絵画、彫刻、工芸、古文書、典籍<sup>てんせき</sup>)、民俗文化財、天然記念物の各分類で合計約27,000件が報告されている。

さらに、史跡、名勝及び466箇所を数える周知の埋蔵文化財包蔵地を合わせると、鎌倉市における令和3年(2021年)4月1日現在の文化財数は約27,500に及ぶが、そのうち指定文化財は609件、登録有形文化財は34件である。

#### イ 指定・登録文化財等

令和3年(2021年)4月1日現在の鎌倉市における指定文化財は、国宝15件を含む国指定216件、神奈川県指定66件、鎌倉市指定328件の総数609件を数える。また、国登録有形文化財として34件が登録されている。



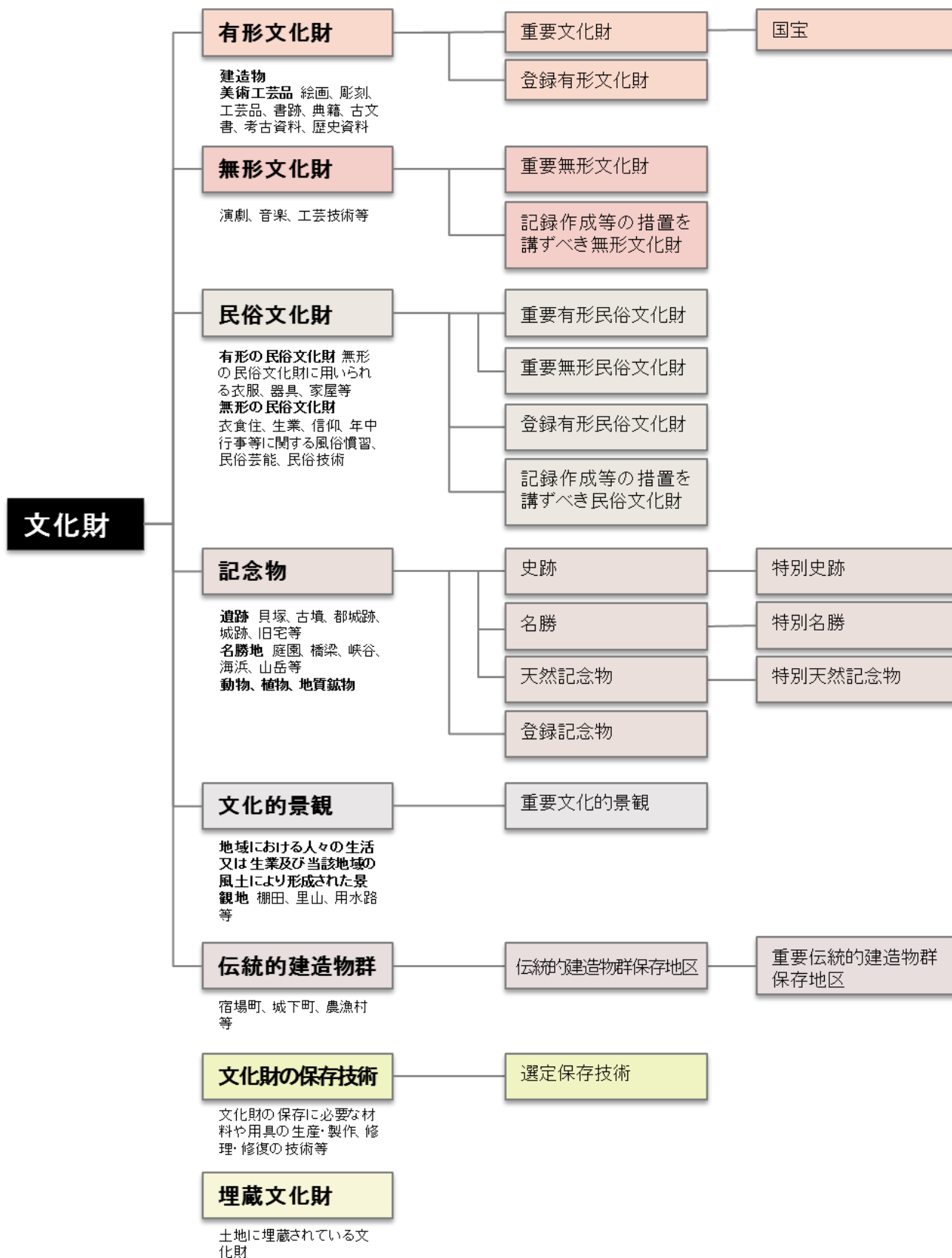


図1-19 文化財の体系

表1-3 指定等文化財の件数

(令和3年4月1日現在)

	有形文化財										民俗文化財		記念物			合計
	建造物	絵画	彫刻	工芸	書跡	典籍	古文書	考古資料	歴史資料	無形文化財	有形	無形	史跡	名勝	天然記念物	
国宝	1	4	1	6	3											15
国指定	22	29	38	22	24		27	4	2				31	3		202
県指定	8	9	23	15	2			2			2	1	2			64
市指定	33	53	86	29	19	5	15	17	5	2	23		9		32	328
国登録	34															34
合計	98	95	148	72	48	5	42	23	7	2	25	1	42	3	32	643

## (ア) 国指定文化財

国指定文化財は、建造物等の有形文化財 183 件、記念物 34 件の計 217 件からなるが、それらの内訳は銅造阿弥陀如来坐像、円覚寺舎利殿等を含む国宝 15 件、重要文化財 168 件、鶴岡八幡宮境内、建長寺境内、鎌倉大仏殿跡、永福寺跡等の史跡が 31 件、名勝等が 3 件（「名勝」として指定を受けている「瑞泉寺庭園」、及び「史跡及び名勝」として指定を受けている「建長寺庭園」、「円覚寺庭園」）となっている。

## (イ) 神奈川県指定文化財

神奈川県指定文化財 64 件の内訳は、覚園寺本堂（薬師堂）等の有形文化財が 59 件、面掛行列等の民俗文化財が 3 件、百人やぐら等の史跡が 2 件である。

## (ウ) 鎌倉市指定文化財

鎌倉市指定文化財は、有形文化財 285 件、無形文化財 2 件、記念物 41 件の計 328 件からなるが、それらの内訳は、鶴岡八幡宮末社白幡神社本殿、及び拝殿（建造物）等の有形文化財が 262 件、御霊神社神輿、面と衣裳、寿福寺庚申塔等の有形民俗文化財が 23 件のほか、鎌倉神楽、鎌倉木遣唄が無形文化財として指定を受けている。また、記念物は、史跡として十一人塚等 9 件、天然記念物として鶴岡八幡宮ビヤクシン等 32 件が指定されている。

## (工) 国登録有形文化財

令和3年(2021年)4月1日現在の登録有形文化財は、鎌倉文学館本館、旧華頂宮住宅主屋等34件である。

## (オ) 景観重要建造物・市景観重要建築物等

令和3年(2021年)4月1日現在、景観重要建造物は旧川喜多邸別邸(旧和辻邸)の1件、市景観重要建築物等は、鎌倉市長谷子ども会館(旧諸戸邸)、東勝寺橋、極楽洞、旧神奈川県営湘南水道鎌倉加圧ポンプ所、萬屋本店等34件である。

## (2) 歴史上価値の高い建造物

既に記載のとおり、鎌倉市内には国・県・市により文化財として指定等を受けているものだけで、1件の国宝（建造物）、63件の重要文化財（建造物）、29件の登録有形文化財（建造物）、45件の記念物（史跡・名勝）が存在し、また、景観法により指定を受けた、1件の景観重要建造物も存在している。全てについて取り上げることはできないため、ここでは特に法の指定を受けている建造物及び記念物について次に記載する。

### ア 社寺建築

市内には、鎌倉地域を中心に、現在も数多くの社寺等の宗教施設が存在する。これは鎌倉幕府が樹立されて以来、幕府等によって積極的な社寺建立が行われた結果であり、平成26年（2014年）11月現在の宗教法人名簿掲載の社寺等は174に上り、その内訳は神社43（神道系42、その他1）、寺院122（天台宗2、真言宗系15、浄土宗12、浄土真宗2、時宗7、臨済宗建長寺派19、臨済宗円覚寺派23、曹洞宗3、日蓮宗系33、真言律宗1、華嚴宗1、その他4）を数え、これらの社寺等の多くが貴重な文化財を有している。

#### (ア) 鶴岡八幡宮

上宮、摂社若宮、末社丸山稻荷社本殿、大鳥居（一の鳥居）の4件の重要文化財（建造物）を有し、境内は史跡に指定されている。

鶴岡八幡宮は、康平6年（1063年）に源頼義が石清水八幡宮を鎌倉由比郷かんじょうに勧請し、治承4年（1180年）に源頼朝が現在地に遷したのがはじまりと伝わる。

建久2年（1191年）に社殿を焼失し、後方の山上に改めて石清水八幡宮を勧請して上宮を創建、現在見るような若宮及び上宮からなる構成となった。

上宮は建久2年（1191年）の大火による若宮の炎上を契機として創り直されたもので、現在の社殿は文政11年（1828年）の再建である。中世以来の壮大な社殿構成の面影を残しつつ、近世の技法で華やかに装飾された社殿群は、江戸時代の神社建築を代表するものといえる。

摂社若宮は、度重なる焼亡の都度、幕府によって再建された。現在の若宮社殿は本殿、幣殿へいでん、拝殿はいでんが工字型に接続する複合社殿で、棟札から寛永元年（1624年）の建築であることが判明している。

上宮の西側に位置する末社丸山稻荷社本殿は、その様式から、大部分が明応9年（1500



写真1-33 鶴岡八幡宮 上宮



写真1-34 鶴岡八幡宮 摂社若宮



年)に造営されたものと考えられるが、一部にはこれよりもさかのぼるとみられる部分もあり、鎌倉の歴史を示す貴重な古建築である。

治承4年(1180年)12月に頼朝が創建した大鳥居(一の鳥居)は、境内から海岸へ向かい一直線に造営された鶴岡八幡宮の参道である若宮大路の南端に位置し、度重なる造替を経て、現在の鳥居は、寛文8年(1668年)に建造されたことが、東方柱の「寛文八年戊申八月拾五日御再興」の刻銘により明らかにされている。



写真1-35 鶴岡八幡宮  
末社丸山稲荷社本殿

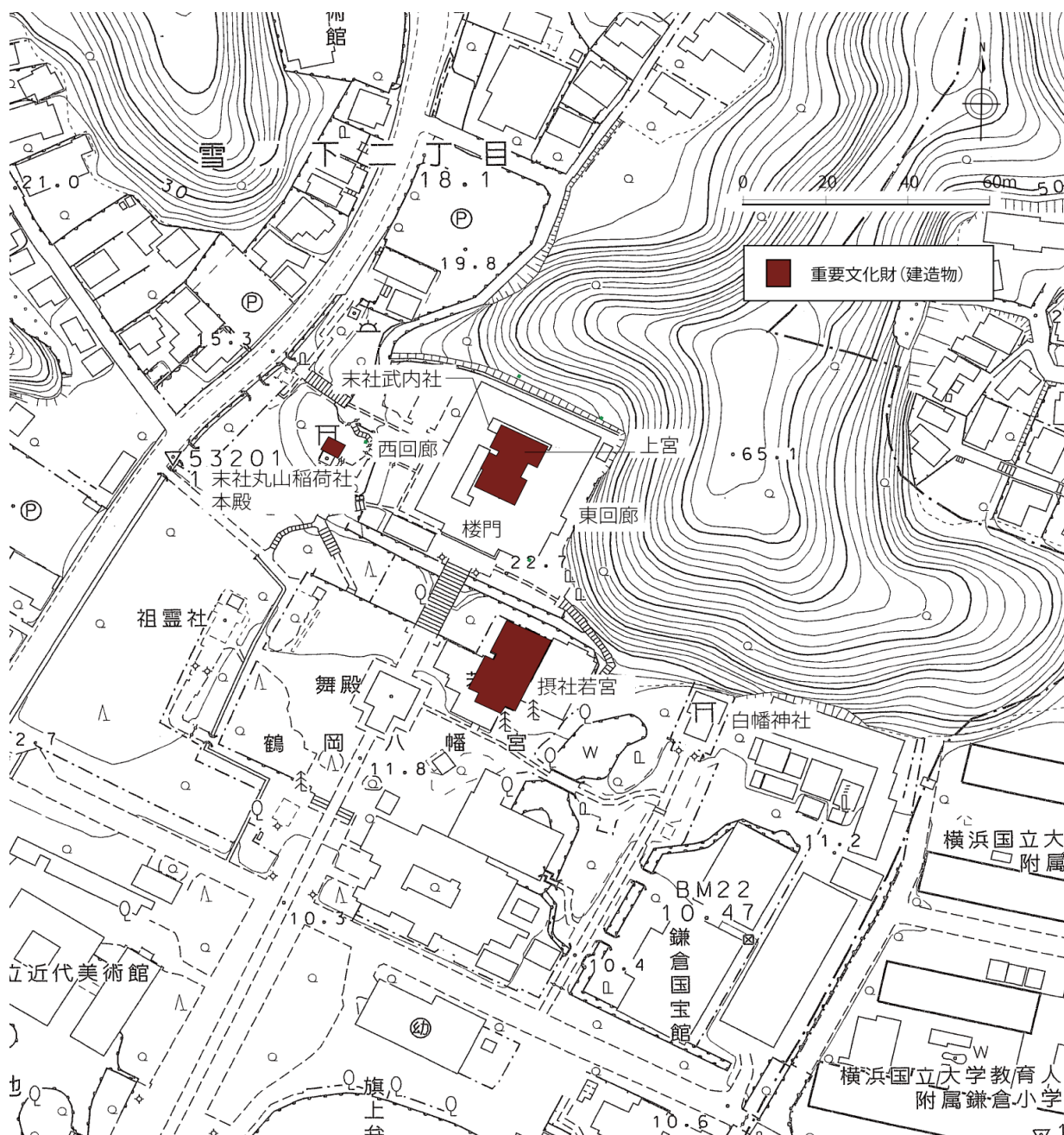


図1-20 鶴岡八幡宮における重要文化財(建造物)の配置(上宮、摂社若宮、末社丸山稲荷社本殿)





写真1-36 鶴岡八幡宮 大鳥居(一の鳥居)



図1-21 鶴岡八幡宮における重要文化財(建造物)の配置(大鳥居(一の鳥居))

## (イ) 荏柄天神社

荏柄天神社は、鶴岡八幡宮の東方に位置し、境内は国指定史跡に指定されている。長治元年（1104年）に菅原道真すがわらのみちざねを祭神として創建されたと伝わり、鎌倉時代には、源頼朝が鎌倉に入った際に新たな社殿を造営し、幕府の鬼門（北東）を鎮護する神として祀るなど、当初からの幕府との関わりが記録に見える。現存する本殿は、江戸時代初頭、寛永元年（1624年）の鶴岡八幡宮若宮の社殿造営に伴い、鶴岡八幡宮若宮の旧本殿を移築して再興されたものである。鶴岡八幡宮若宮は、正和5年（1316年）再建後、中世を通じて維持されていることから、この本殿は14世紀初頭にさかのぼる可能性があり、鎌倉時代における鶴岡八幡宮の主要社殿を伝える唯一の貴重な例として、重要文化財（建造物）に指定されている。



写真1-37 荏柄天神社 本殿

形式は三間社流造さんげんしゃながれづくり、屋根は銅板葺どうばんぶきで、三間社としては大型で内外ともに細部の意匠いしょうも優れ、中世鎌倉における社殿の様式を知る上で欠くことのできない貴重な遺構である。

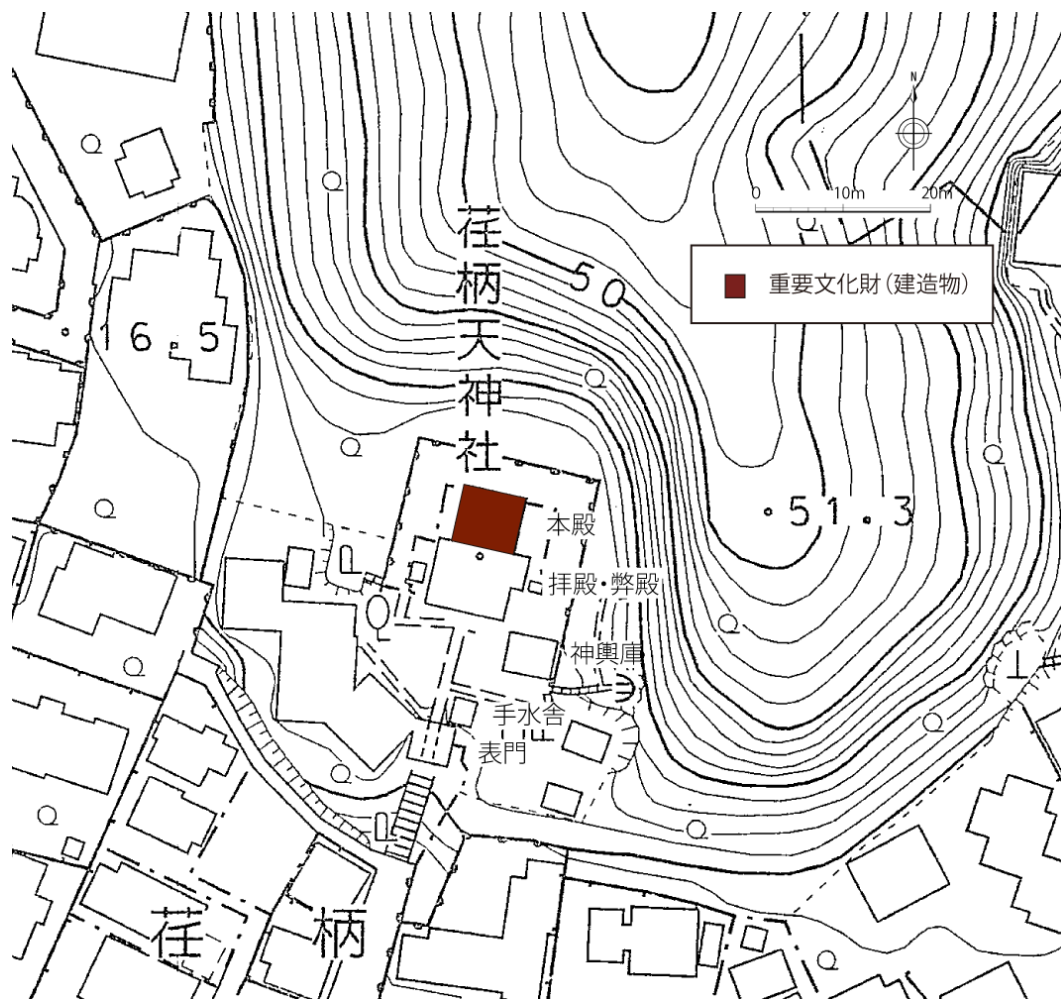


図1-22 荏柄天神社における重要文化財(建造物)の配置



## (ウ) 建長寺

重要文化財の建造物6件(山門・仏殿・法堂・からもん しょうどう唐門・昭堂・だいがくぜんじとう大覚禪師塔)を有し、境内は史跡、方丈庭園及び仏殿前庭は史跡及び名勝に指定されている。

建長寺は、臨済宗建長寺派の大本山で、建長5年(1253年)の創建になる。境内は、山門、仏殿、法堂を一線上に並べ、最奥部に方丈と庭園を配している。鎌倉時代に宋様式の本格的な禅宗伽藍を整え、室町時代後期には寺勢の衰えた時期もあったが、江戸時代に入ると一貫して諸堂再建の努力が払われた。

山門は、安永4年(1775年)の建設になる。禅宗様を基調とした三間二階二重門で、下層を吹き放し、上層内部には仏壇を備え、いりも やづくり屋根は入母屋造銅板葺で、二階正面中央にはのきから は ふ軒唐破風を設ける。三間二重門として東日本最大の規模を誇る重要な建築である。

仏殿は、寛永5年(1628年)に芝増上寺に建立された徳川秀忠夫人すうげんいん みたまや崇源院の御霊屋旧殿を正保4年(1647年)に移築したもので、伽藍配置の中心軸上に配され、山門と法堂の間に位置する。

法堂は、文化5年(1808年)に再建着手、文政8年(1825年)に竣工した方三間もこし付の仏堂で、大型禅宗様仏堂として高い価値がある。屋根は入母屋造、銅板葺で、要所に江戸時代後期らしい装飾性も認められる。

唐門は、建長寺方丈ほうじょうりゅうおうでん竜王殿の正門で、仏殿とともに芝増上寺崇源院御霊屋から正保4年(1647年)に移築されたものである。「徳川実紀」より、芝増上寺境内における創建年代は寛永3～5年(1626～1628年)の間と考えられる。軸部と架構は禅宗様であり、全体に漆・金箔・彩色・金具などで装飾されている。

昭堂の位置する西来庵は、建長寺開山蘭溪道隆たっしよの塔所で、現在は修行僧の修禅の場となっている。昭堂の建立年代は、建長寺棟梁の家柄を持つ「河内家文書」の記述より寛永11年(1634年)頃と推定され、再興棟札によると、延宝5年(1677年)に大修理を受けたようである。扉はさらに古く



写真1-38 建長寺 山門



写真1-39 建長寺 仏殿



写真1-40 建長寺 法堂



写真1-41 建長寺 唐門

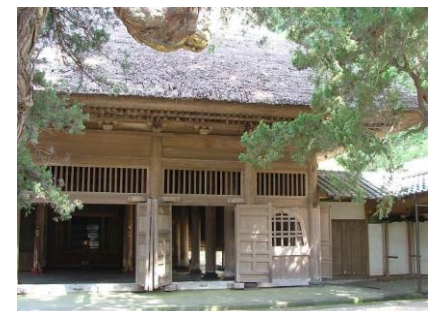


写真1-42 建長寺 昭堂







## (工) 円覚寺

弘安5年(1282年)に北条時宗によって創建された円覚寺は、神奈川県で唯一の国宝建造物である舍利殿を有し、境内は史跡、<sup>びやくろち</sup>白鷺池及び<sup>みょうこうち</sup>妙香池からなる庭園は史跡及び名勝に指定されている。

現在の舍利殿は、永禄6年(1563年)の大火後の復興事業として、後北条氏の助力により、鎌倉の尼寺であった太平寺の仏殿を天正年中(1573~1592年)に移築したものと考  
えられている。太平寺におけるこの建物の建立年代は明らかではないが、15世紀前半に建立された<sup>しょうふくじ</sup>正福寺地蔵堂(東京都東村山市)と酷似することから、室町時代中頃に建立されたものと推測される。禅宗とともに伝来した宋の建築様式、禅宗様の仏堂で、現存する禅宗様建築の典型とされる。



写真1-43 円覚寺 舍利殿

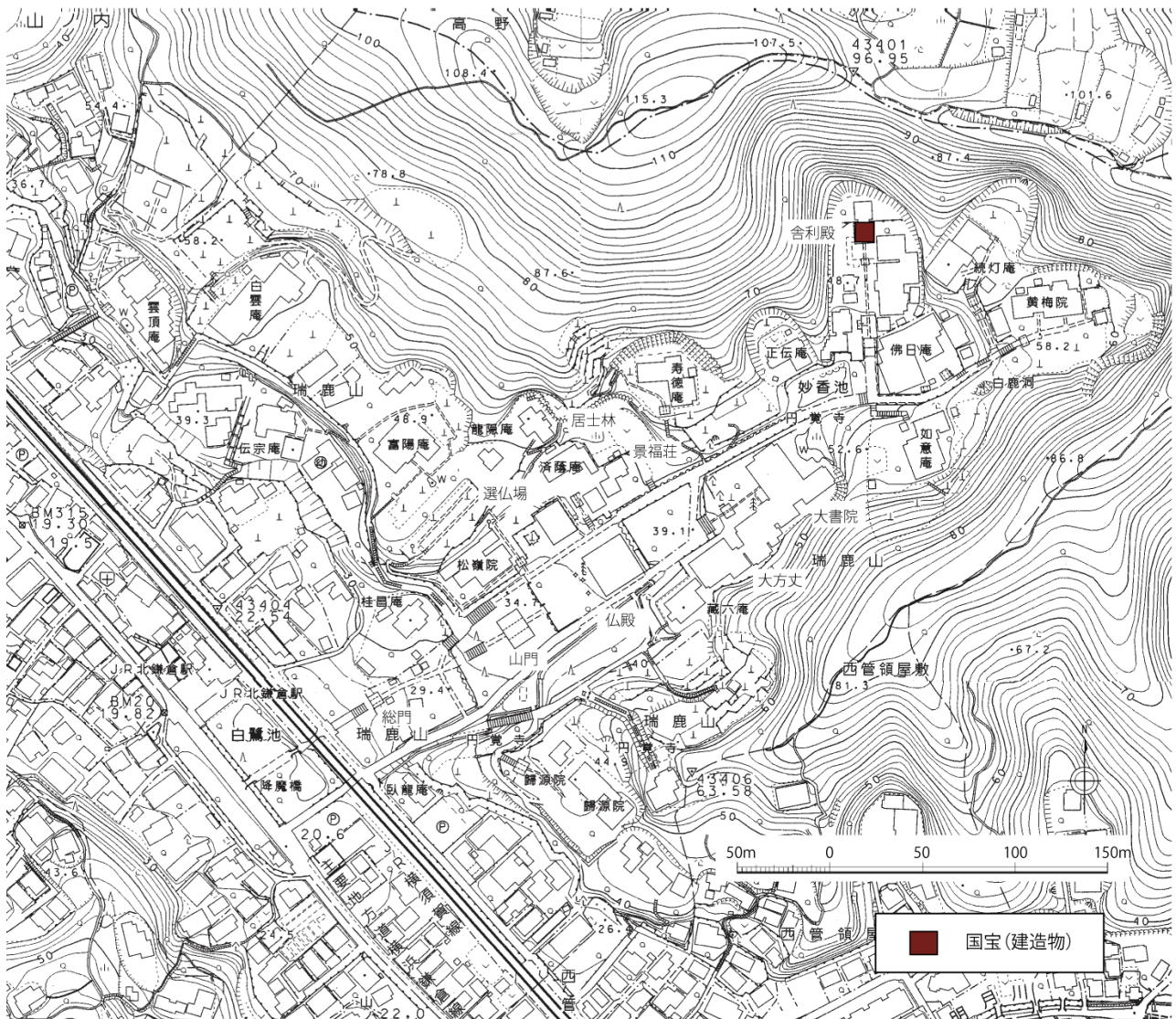


図1-24 円覚寺における国宝(建造物)の配置



## (オ) 高德院

鎌倉大仏又は、露座の大仏として親しまれている、国宝（彫刻）に指定された銅造阿弥陀如来坐像を本尊とする。大仏は、鎌倉幕府の全面的な支援により造営されたと考えられ、高度かつ独自の鑄造技法によって造られた鎌倉時代の姿を伝えている。

大仏は建長4年（1252年）に鑄造を開始された金銅八丈の如来像であり、遅くとも文永元年（1264年）以前には完成していたと推測される。また、同5年（1268年）には大仏殿も完成し、「大仏殿」と称する寺院であったとされるが、数度に渡り倒壊と再建を繰り返し、応安2年（1369年）の倒壊を最後に、建物再建に係る記録が認められなくなる。これ以降、大仏は露座となり、寺院も荒廃したが、正徳2年（1712年）に江戸浅草の豪商、野嶋新左衛門から寺地屋敷等の寄進をうけた増上寺祐天上人によって高德院として復興された。境内は、鎌倉大仏殿跡として史跡に指定されている。



写真1-44 鎌倉大仏

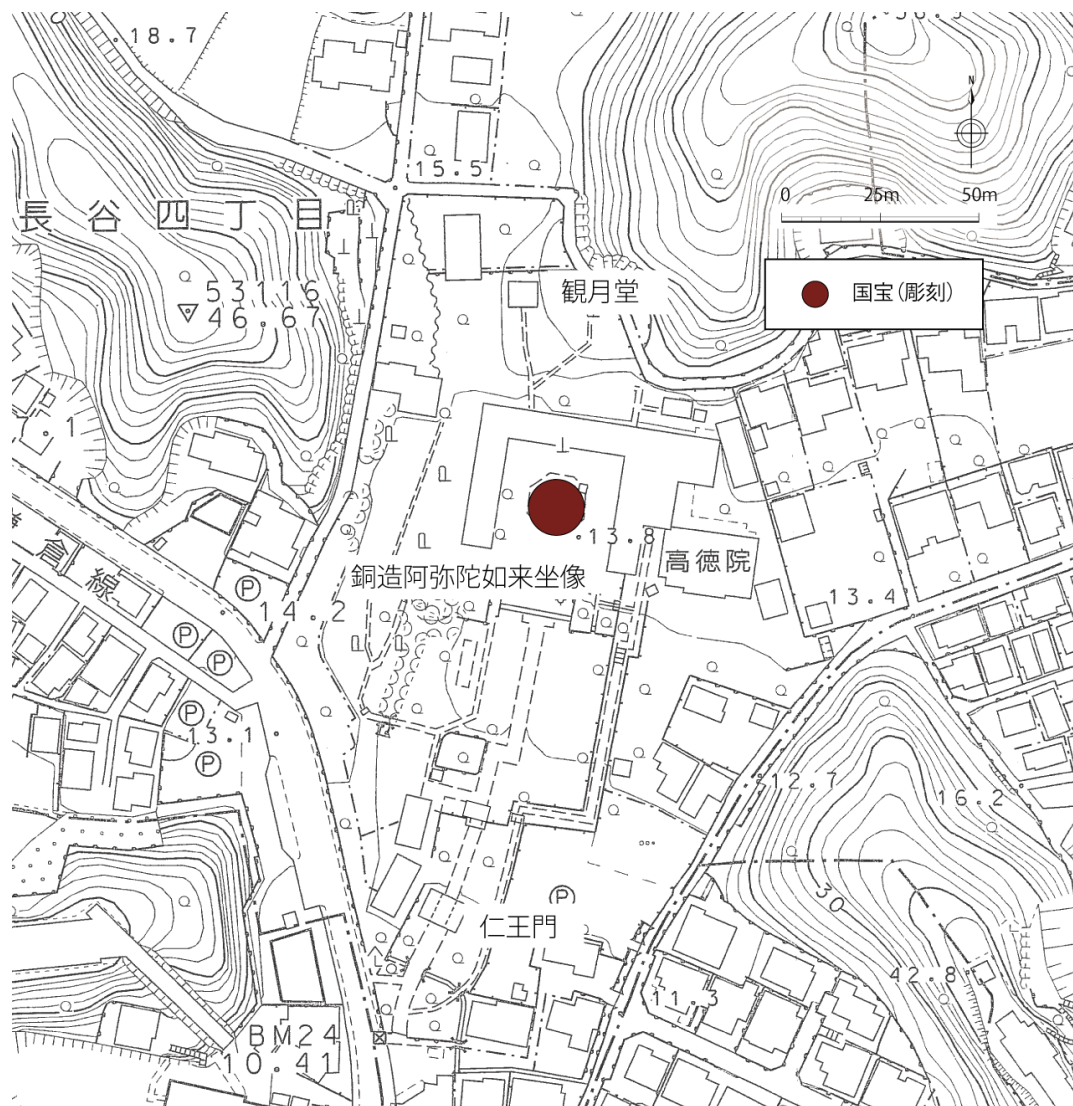


図1-25 高德院における国宝(彫刻)の配置

こうみょうじ

**(カ) 光明寺**

光明寺は、鎌倉時代中期の創建と伝わる浄土宗の寺院である。江戸時代初期には浄土宗の僧侶の養成機関・学問所である「関東十八檀林」に定められ、伽藍を整えたとみられる。本堂は、棟札より元禄11年（1698年）の建立と判明し、重要文化財となっている。部分的に改造や変更が行われているが、軸部から小屋組まではほぼ当初のまま桁行九間、梁間十一間、正面三間向拝付の形式で、鎌倉の近世仏堂のうち最大の規模である。内部は上段式になる内陣と後陣、二重構成になる広大な外陣など、大規模な浄土宗本堂として特色ある構成で、関東十八檀林の中心建築を知る上で貴重な遺構といえ、また完成度の高い鎌倉大工の作品であることにも価値が認められる。



写真1-45 光明寺 本堂

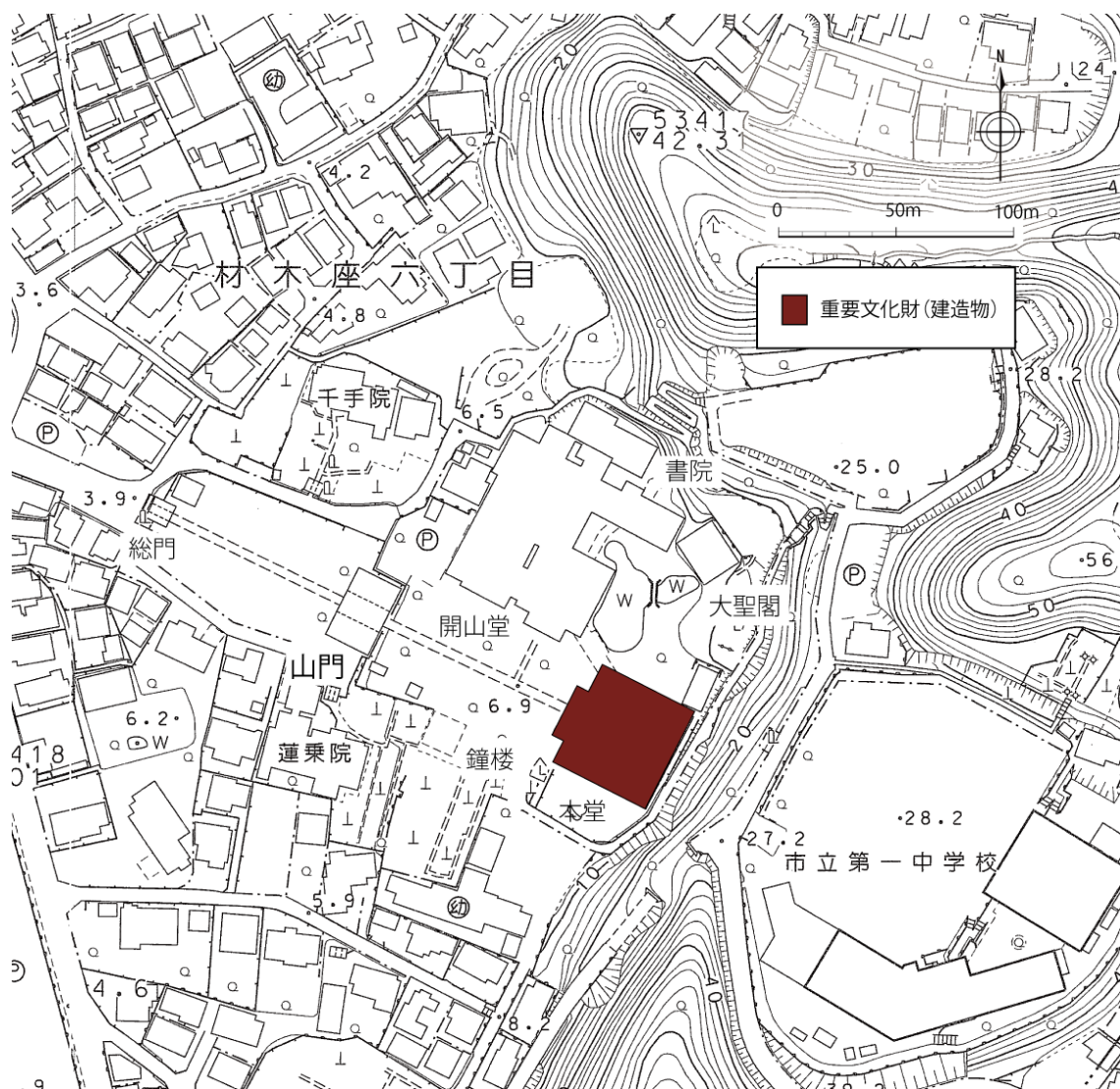


図1-26 光明寺における重要文化財(建造物)の配置



## (キ) 英勝寺

重要文化財の建造物5棟（仏殿・山門・鐘楼・<sup>しょうろう</sup> 鐘楼・<sup>しどう</sup> 祠堂・祠堂門）を有する。

英勝寺は浄土宗の尼寺で、西に源氏山<sup>げんじやま</sup>が控え、南は寿福寺と隣接する。東南端の惣門から入ると、右手に鐘楼、北に折れて山門の正面に仏殿がたち、山門・仏殿の西側の段に開基英勝院の祠堂がある。山門と仏殿及び鐘楼は寛永創建時の建築で、祠堂と祠堂門（唐門）も江戸初期の建築である。

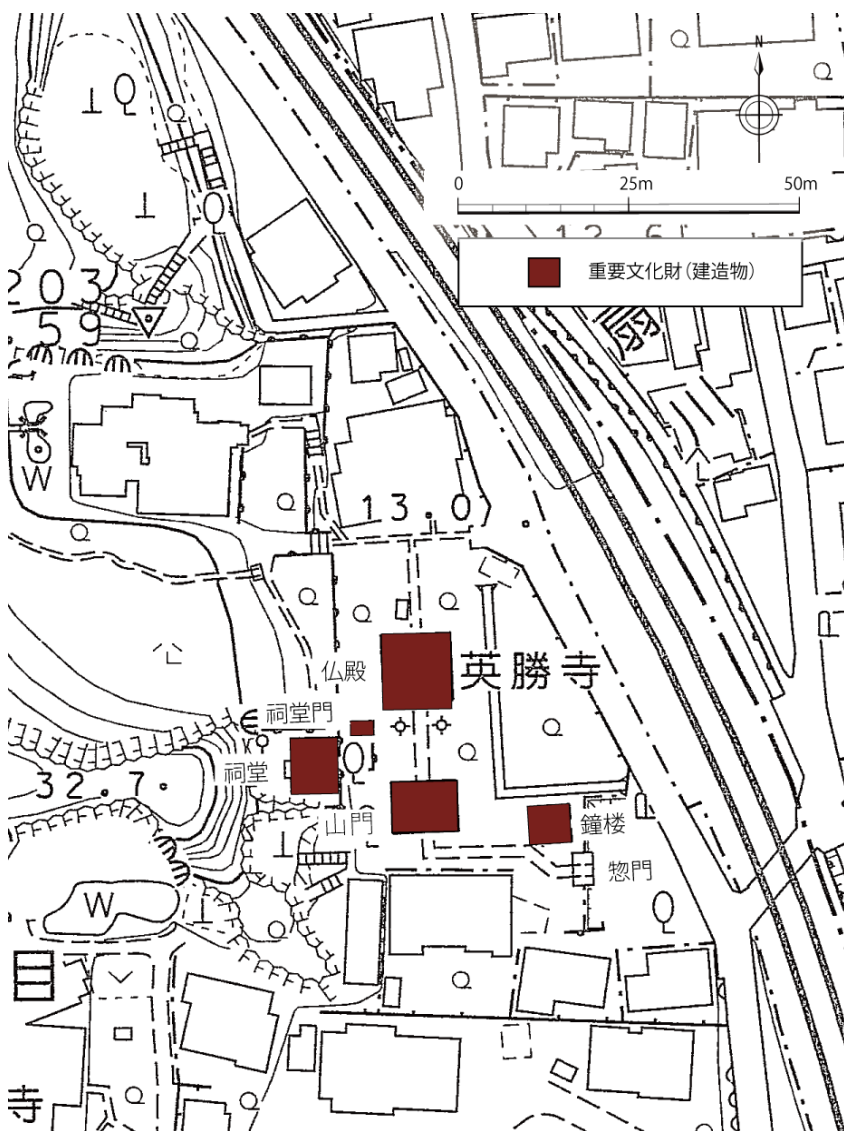


図1-27 英勝寺における重要文化財(建造物)の配置



写真1-46 英勝寺 仏殿



写真1-47 英勝寺 山門



写真1-48 英勝寺 鐘楼



写真1-49 英勝寺 祠堂門

## イ 社寺建築以外の建築物

### (ア) 旧一条恵観山荘

旧一条恵観山荘は、後陽成天皇第九皇子であった一条恵観（兼遐）が京都西賀茂川上に造った山荘で、建立年代は正保3年（1646年）ごろといわれる。のち醍醐家に伝わり、戦後鎌倉に移された。江戸初期数寄屋造の優れた作として重要文化財の建造物に指定されている。



写真1-50 旧一条恵観山荘

### (イ) 旧石井家住宅

この住宅の所有者であった石井家は地待の出で、近世はこの地で名主を務めた旧家である。現在は植木の龍寶寺に寄贈され、同寺境内に移築されている。

平面は土間沿いに広間をとった三間取りの形式で、構造も古式であり、17世紀後半ごろの建築と推定される。神奈川県下における農家の古い典型として貴重な遺構であり、重要文化財の建造物に指定されている。



写真1-51 旧石井家住宅

### (ウ) 旧川喜多邸別邸(旧和辻邸)

旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）は、東京都練馬区にあった高名な哲学者和辻哲郎邸の主屋を昭和36年（1961年）に移築したもので、景観法に基づく景観重要建造物に指定されている。

この建物は、昭和13年（1938年）に、神奈川県大山の麓にあった古民家を解体移築したもので、さらにその古民家はもともと松田にあったものを移築したとされており、江戸末期の創建と推察されている。

なお、この邸宅を所有者していた川喜多長政と妻の川喜多かしこは、国立フィルムセンターの設立に貢献するなど、日本映画史上に大きな足跡を残した夫妻である。



写真1-52 旧川喜多邸別邸(旧和辻邸)



## ウ 石造物

### (ア) 建長寺大覚禪師塔

大覚禪師塔は西来庵背後の丘上に位置し、建長寺開山、蘭溪道隆の墓塔と伝える。材質は、基壇を除き全て安山岩製で、鎌倉地方における石造無縫塔（卵塔）の代表例であり、保存状態が非常に良く、後世修補の痕が無い。各部の形態もよく整い、この種の塔婆の貴重な遺構である。

### (イ) 浄光明寺五輪塔

浄光明寺五輪塔は総高 322 cm の巨大な五輪塔で、浄光明寺の隣の谷の多宝寺址たほうじしにあり、建造物として重要文化財に指定されている。

関東大震災で被害に遭った際に基礎から銅製骨蔵器 4 個が発見され、その中の最大のものに「多宝寺覚賢長老遺骨也、嘉元四年二月十六日入滅」の刻銘があったことから、本塔が覚賢の墓塔であることが確認された。翌徳治 2 年（1307 年）の一周忌に塔が建てられたことが、金沢文庫所蔵の諷誦文ふじゅもんにより判明している。



写真1-53 浄光明寺 五輪塔

### (ウ) 極楽寺忍性塔・五輪塔

2 件とも史跡極楽寺境内に位置し、重要文化財の建造物に指定されている。

忍性塔は 357cm の安山岩製の巨大な五輪塔で、鎌倉時代の特色をよく示している優作の一つである。昭和 51 年（1976 年）の解体修理の際に、地輪内から、金銅製の骨蔵器（嘉元元年十一月日良観上人舍利瓶記刻銘）一合と銅製の骨蔵器（嘉元元年十一月廿五日賢明上人入滅記刻銘）が発見され、「鎌倉極楽寺忍性塔納置品」として重要文化財に指定された。また、これにより造塔の時期が明確になり、忍性を埋葬した塔であることも確定した。



写真1-54 極楽寺 忍性塔

極楽寺五輪塔は、忍性塔と同じ一角にあり、その左後方に位置する比較的小規模な五輪塔である。地輪正面に銘文があり、延慶 3 年（1310 年）の年記から造塔の時期が分かっている。鎌倉地方の年代が明らかで形の整った五輪塔として貴重である。

## (工) 覚園寺開山塔・大燈塔<sup>だいとうとう</sup>

2件とも史跡覚園寺境内に位置し、重要文化財の建造物に指定されている。

開山塔は「開山大和尚、正慶元年壬申仲冬廿七日造立」の刻銘があり、正慶元年（1332年）の建立であることが知られる。安山岩製の巨大な塔で、関東形の宝篋印塔<sup>ほうきょういんとう</sup>の代表作である。昭和40年（1965年）度の解体修理時に石室内から発見された開山骨蔵器等は「鎌倉覚園寺開山塔納置品」として重要文化財に指定されている。

大燈塔は開山塔の東に並んで建つが、元は北にあったものを天明の修理に伴い東方に移したと考えられている。「大燈和尚之塔、正慶元年壬申仲秋廿八日建立」の刻銘があり、開山塔と同じく正慶元年（1332年）の建立の石造宝篋印塔である。昭和40年（1965年）度の解体修理時に石室内から発見された<sup>かつゆうそうじこ</sup>褐釉双耳壺等は「鎌倉覚園寺大燈塔納置品」として重要文化財に指定されている。

## (オ) 安養院宝篋印塔<sup>あんよういん</sup>

安養院は、北条政子が夫である源頼朝の冥福を祈って笹目に建てた長楽寺が鎌倉末期にこの地に移されたものといわれ、政子の法名であった安養院が寺名になっている。

本堂裏手に建つ宝篋印塔は「徳治三年」（1308年）と見られる年号があり、善導寺の尊観の墓と伝えられている。鎌倉に現存する宝篋印塔の中で年号が推定できる最も古いものとして、重要文化財に指定されている。



写真1-55 安養院 宝篋印塔



## エ 記念物

### (ア) 史跡

史跡については、鶴岡八幡宮境内、建長寺境内、円覚寺境内及び鎌倉大仏殿跡などの社寺境内をはじめ、寺院跡である永福寺跡、武家館跡である北条氏常盤亭跡、港跡である和賀江嶋の他、切通など全31件が指定されている。

切通の代表的なものとしては、名越切通、朝夷奈切通、巨福呂坂、亀ヶ谷坂、仮粧坂、大仏切通、極楽寺切通が「七口」あるいは「七切通」と呼ばれているが、このうち極楽寺切通以外の六つの切通が史跡に指定されている。

永福寺跡については、現在、歴史教育の場として幅広く活用するため、発掘調査成果に基づき三堂基壇や苑池の復元的な整備事業を進めている。



写真1-56 永福寺跡 三堂基壇

### (イ) 名勝

名勝及史跡として、建長寺庭園（仏殿前庭と方丈裏庭園）、円覚寺庭園（仏殿の前庭、妙香池、白鷺池）の2件、名勝として瑞泉寺庭園（夢窓疎石作庭の本堂裏庭園）の1件、計3件が指定されている。



写真1-57 建長寺庭園





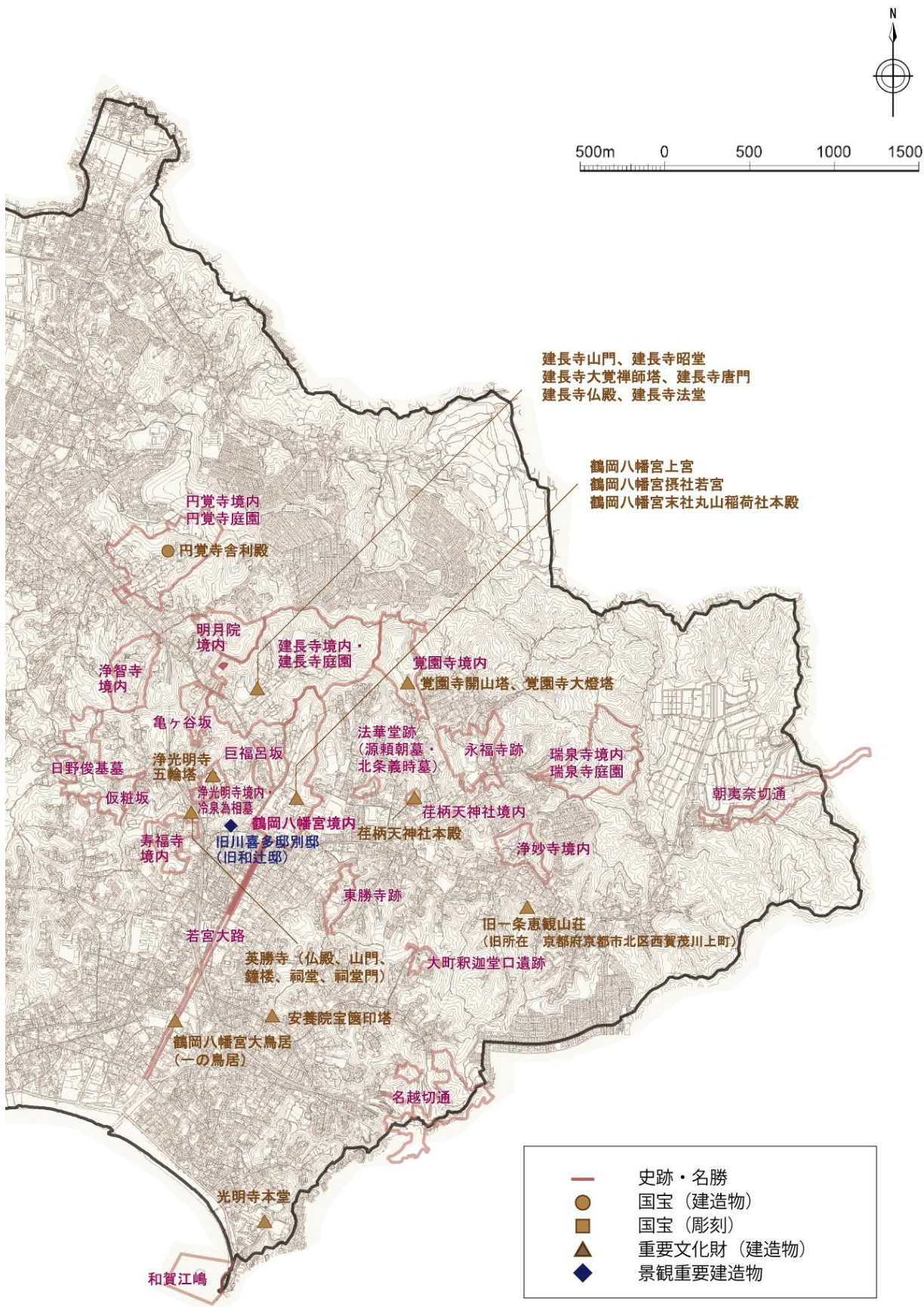


図1-28 史跡・名勝、国宝(建造物・彫刻)、重要文化財(建造物)、景観重要建造物

### (3) 歴史及び伝統を反映した人々の活動

鎌倉においては、「御霊神社の面掛行列」の1件が県指定無形民俗文化財として指定されているほか、「鎌倉神楽」、「鎌倉木遣唄」の2件が市指定の無形文化財として指定されている。ここではこれらに加え、「流鏝馬神事」、「鎌倉彫」、「作刀」について記載する。

#### ア 面掛行列

毎年9月18日に坂ノ下の御霊神社における祭礼に際して行われる面行列で、県指定無形民俗文化財に指定されている。

奈良時代に盛んであった仏教布教のための仮面劇、「伎楽」の面を用いて演じられる。伎楽はその後衰退したため、現在伎楽の面を祭礼に用いる例は殆どなく、全国的に希少となった「伎楽面風流」を今に伝えるという意味で貴重な文化遺産である。

行列は同心・金棒を先頭に、囃子連、幟、神宝類、猿田彦、獅子頭、面をつけた10人、神輿と続く。面の名称は、いずれも俗称だが、行列の順番は、爺、鬼、異形、鼻長、翁、烏天狗、福禄寿、火吹男、阿亀、女と並ぶ。妊婦役の阿亀のお腹は、豊年・豊漁の象徴とされる。

もとは、鶴岡八幡宮の祭礼にも面行列は加わっていたといわれ、同じような行列は山ノ内の八雲神社にも残されている。明治時代以後、鶴岡八幡宮では面掛行列を行わなくなり、八雲神社の祭礼でも面の展示のみが行われるようになったため、現在面掛行列を伝えるのは御霊神社のみである。



写真1-58 面掛行列

#### イ 鎌倉木遣唄

木遣とは、文字通り「木を遣る」ことである。即ち、大木や土木建築用の用材・石材など重量物を運搬する作業に際し、掛け声に歌詞が伴い成立、固定化したものが木遣唄だといわれている。

鎌倉鳶職組合によって伝承される鎌倉木遣唄は本格的な江戸系鳶職木遣唄の分類に属す。江戸木遣唄の特徴は、木遣師（音頭取り）が「兄」と「弟」の二組に分かれ、まず兄の一人が発声し、次いで側と称する多勢の者が唱和をし、その後「兄」と「弟」が交互に別の歌詞を唄い続けていくことを基本とする。また、歌詞が七七七五の長詞型が多いことも特徴で、鎌倉木遣唄はこの江戸系鳶職木遣唄と同じ特徴を有している。



写真1-59 木遣唄

鎌倉木遣唄は、上棟式、新築祝などをはじめ、宴席、消防出初式、鶴岡八幡宮手斧始式、



あるいは葬儀などの場で儀式として唄われている。歌詞は鎌倉に因んだものも多くその場に応じた唄が唄われる。祭礼や慶時には「真鶴まなづる」、「手古てこ」、「棒車ぼうぐるま」、その手じめの時には「土佐」でしめくくる。また、葬儀には「真鶴まなづる」、「小車こぐるま」、「のぞき」などが唄われている。この他、計四十八曲が鎌倉鳶職組合木遣保存会により保存、伝承され後継者の育成が図られている。

## ウ 鎌倉神楽

鎌倉神楽は鎌倉、藤沢、横浜南部地区を中心とした地域の神職が組織を組んで例祭等に行う神楽で、湯立神楽、湯花神楽、海岸で行われるものは潮しお（汐）神楽とも呼ばれる。

神楽の舞処には山飾を中央に掲げ、四方に立てた竹に縄を渡し、それぞれの竹にも縄を廻らし、緑・赤・青・黄・白の五色の紙垂ごしきを付け、蔭しでを敷く。湯釜は舞処近くの所定の位置に竈を設けて据える。

湯花というのは大釜で焚く湯を搔く舞の際に、幣串へいぐしに添って立ち上る湯玉を花と見ての表現で、その湯花の立ち方で年占をし、また、湯笹で振った湯に掛ると厄除けとなるといわれている。

表1-4 鎌倉神楽保存会による鎌倉神楽の次第

1	うちはや 打囃し	笛、太鼓の旋律を合わせる。
2	はのう 羽能	四方に米をまき、諸霊を和める。
3	お祓い	釜に酒を注ぎ、かまど、神楽座、参列者等を祓う。
4	ごへいまね 御幣招き	火の神、水の神を招神する。
5	ゆあ 湯上げ	火の神、水の神から生まれた尊いお湯を神々に供える。
6	なかい 中入れ	関係者一同が神酒 <small>みき</small> を分かち、神気をいただく。
7	かきゆ 搔湯	釜の中に御幣を入れ、湯をかき混ぜ、湯花の立ち上がりで吉凶占いを行う。泡柱が高く上がると吉といわれている。
8	だいさんく 大散供	羽能の二人舞で祓い清めの神楽を行う。白扇の上に白米を持ち、四方に散供する。
9	ささまい ゆぐら 笹舞（湯座）	湯笹を湯釜に三度入れてその湯笹を左右に振り上げ、その飛び散る湯を浴びると一年間無病息災で過ごせるといわれる。
10	いはら 射祓い	細い竹で作った弓矢を四隅に向かって射る。矢を拾った人は、開運の御神矢として持つことができる。五本目の矢は正面に向けられるが、神様が鎮座しているため放たれることはない。
11	けんまい もどき 剣舞・毛止幾	赤い面の天狗は剣を持ち、黒い面の山の神は大きなしゃもじを持つ。天下泰平と豊漁、海上安全を願いなが舞う赤い面の天狗に対し山の神は滑稽な動きで邪魔をしようとする。また、しゃもじで撫でられたり、半紙などで口を拭かれた子どもは丈夫に育つといわれている他、まかれたみかんや餅などを食べると風邪を引かないといわれる。

## エ 地域における郷土芸能

鎌倉には、中世以来の長い歴史の中で、祭囃子、田植唄などの多くの郷土芸能が継承されており、現在も地域住民を中心に保存されている。保存継承団体のうち22団体は「鎌倉市郷土芸能保存協会」を組織し、これに参画している。

## オ 流鏑馬神事

鎌倉の流鏑馬神事は、源頼朝が文治3年(1187年)8月15日に鶴岡八幡宮の放生会で奉納した流鏑馬が始まりとされ、境内の中央を東西に走る直線140間(約254m)の道は、頼朝が作った馬場と伝えられている。

こうした中、鎌倉では4月の鎌倉まつり、9月の鶴岡八幡宮例大祭において流鏑馬神事が行われている。

鎌倉まつりにおける流鏑馬神事では、まず、指揮を執る奉行がかぶらや 鏑つが 矢を弓に番えて天と地に対し満月型に弓を引き絞ごこくほうじょうり、天下泰平、五穀豊穰てんちょうちきゅうのしきを祈念する「天長地久之式」を行う。その後、鎧直垂よろいひたたれを着て綾あや 笠がさをかぶり、金糸の家紋入りの射籠手いごてと行むか 藤ばきを身に付けた射手いてにより、馬を全速力で走らせながら三つの的を射る「奉射」が行われる。奉射の1回目では、一尺八寸(約55cm)四方で五色の同心円が描かれた「式之的」、2回目では1尺3寸(約40cm)四方のしきのまと 檜ひのでできた「板的」を用いるが、さらに、奉射の成績上位者により「小的(土器的)」を射る「競射」が行われる。最も多くの的きょうしやの中させた者は「凱陣之式」において、式之的がいじんのしきを持って奉行の前できざ 跪座し、奉行は開いた扇の骨の間からの的をきりぬさ 検分する。奉行が扇を戻して太刀の鯉口を切ると、陣太鼓が三回打ち鳴らされ、一同かちどき 勝鬨なおりをあげる。最後に「直会」が行われ、奉行、射手、諸役の順に御神酒を受けて全ての神事が終了する。

小的に矢が的中すると土器が砕け、中の切麻きりぬさが花吹雪のように風に舞い散る様は、鎌倉まつりにおける流鏑馬神事の風物ともいえる。



写真1-60 流鏑馬神事(鎌倉まつり)

## カ 鎌倉彫

仏師運慶(生年不詳~1224年)の活躍以降、鎌倉には多くの仏師が育ち、仏所と呼ばれる工房組織が形づくられていったが、明治元年(1868年)の神仏分離令の発布をきっかけに廃仏毀釈が行われ、造像への需要が激減した。このため、仏師たちはその伝統的な彫刻技術を調度品や装飾品製作に転用し、「鎌倉彫」という別の道を切り開いた。これが良質な日用品を求め

る人々に重宝され、観光客の土産物としても定着していくこととなった。

鎌倉彫は、我が国の彫刻史上で重要な役割を果たしてきた鎌倉仏師の伝統技術が現代に継承されているものであり、昭和54年（1979年）に経済産業大臣（当時の通商産業大臣）から「伝統的工芸品」としての指定を受けている。



写真1-61 鎌倉彫



写真1-62 鎌倉彫の工房  
（昭和34年（1959年））

## キ 作刀

古来より武器として使われてきた刀剣類は、武家政権の発展とともにその需要も高まり、鎌倉時代に入ると、幕府は全国各地から刀工を招へいし、積極的に作刀活動を進めていった。こうした中、五郎入道正宗は、鎌倉において「相州伝」と呼ばれる作風を確立した鎌倉時代の名工として今に伝わる。日本における作刀は、明治9年（1876年）の廃刀令により衰退することとなるが、現在は、居合道や抜刀道に用いられる武具として、また美術品として所有が認められており、鎌倉の地においても伝統的な技法による作刀活動が続けられている。



写真1-63 鍛錬の様子



#### (4) 埋蔵文化財

令和3年(2021年)4月1日現在、鎌倉市内の埋蔵文化財包蔵地は467箇所を数える。これらのうち、三方を山に囲まれた鎌倉地域に325箇所、それ以外の地域に142箇所が分布する。

時代別には、旧石器時代・縄文時代・弥生時代が56箇所、古墳時代・奈良平安時代が80箇所、中世が363箇所、近世が5箇所、不明が38箇所である。

種別では、やぐらが184箇所、社寺跡が99箇所、散布地80箇所、城館跡63箇所、これらが全体の約80%を占めている。

鎌倉地域は、鎌倉幕府及び後続する鎌倉府の根拠地として中世都市を形成したエリアであり、周囲を取り囲む山稜部及び海浜部を含め、ほぼ全域が周知の埋蔵文化財包蔵地となっており、やぐら、社寺境内・社寺跡、都市遺跡その他の遺跡が濃密に分布している。このような豊富な埋蔵文化財が鎌倉の大きな特徴である。

鎌倉においては、これら豊富な埋蔵文化財の所在を背景に、建築工事等に先立つ試掘・確認調査が年間約60件、発掘調査が同じく20~30件程度実施されており、長年の調査成果の蓄積により、中世都市遺跡の考古学的研究が進展している。



写真1-64 市内から出土した中世の生活用品  
(左上から時計回りに曲物・杓文字、まな板・刀子・卸し板、すり鉢とすりこ木、卸し皿と箸)



写真1-65 市内から出土した中世の漆器



写真1-66 まとまって出土したかわらけ



写真1-67 市内から出土した青磁碗

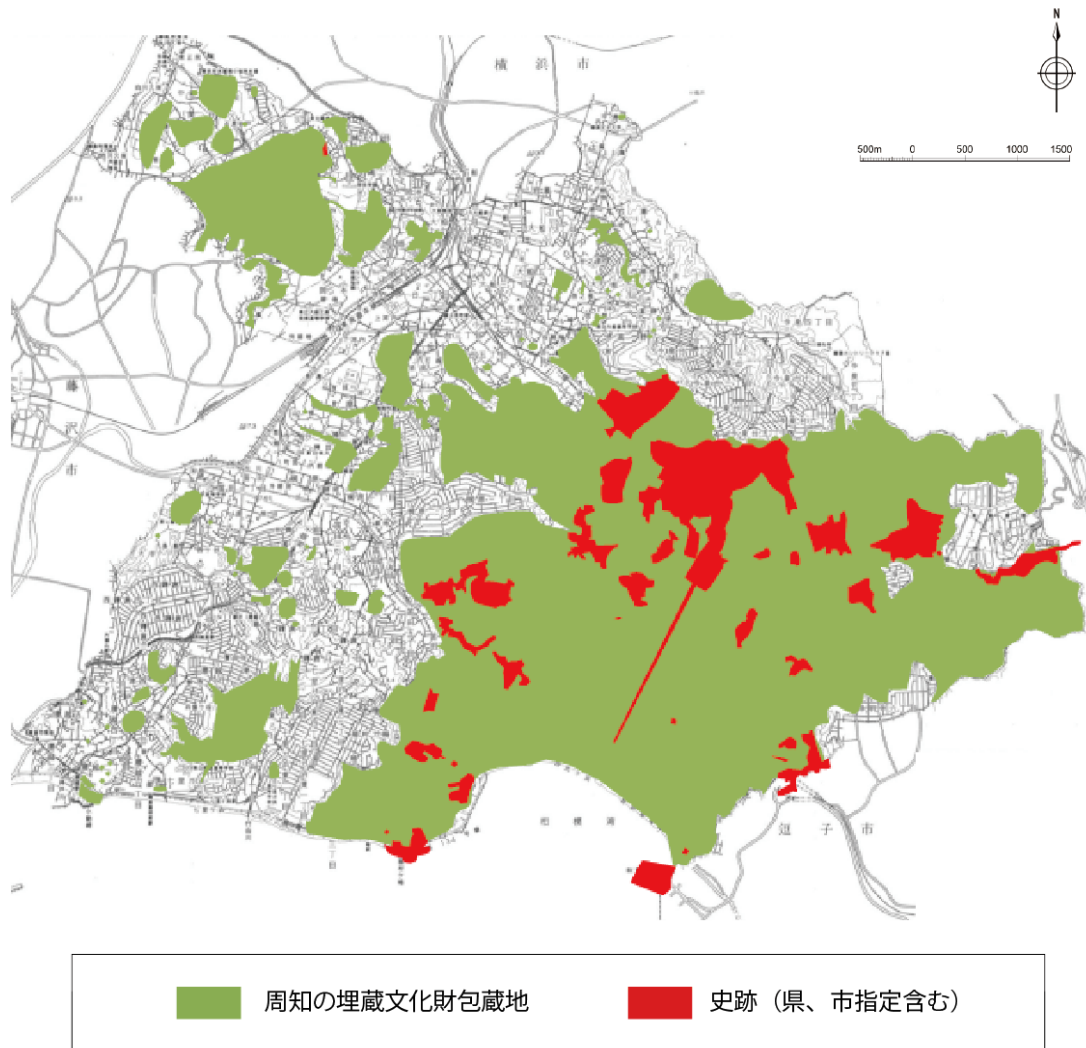


図1-29 史跡・埋蔵文化財包蔵地の範囲

## (5) 文化

### ア 茶道

鎌倉は、寿福寺開山の栄西が「喫茶養生記」を著し、「茶」の効能を説いたことから、茶道発祥の地ともいえる。現在も禅宗寺院等において喫茶の風習が継続しているが、江戸時代初期の茶人山田宗徧（そうへん）（1627～1708年）から始まる宗徧流家元も、鎌倉において茶の湯文化の継承に努めている。

宗徧流は、千利休の孫である千宗旦（せんのそうたん）の弟子の中で特に優れていた、山田宗徧を祖とする。宗徧は、利休が説いた「侘び茶」を宗旦から直々に学び継承した茶人として知られている。



写真1-68 宗徧流の点前

### イ 食文化

日本料理の一つである精進料理は、創建当時の建長寺や円覚寺などの禅宗寺院において、中国から伝わった料理が発展したものとされており、近年の和食ブームにも後押しされ、鎌倉でも観光客を中心に人気を博している。

また、日本人に馴染み深い「けんちん汁」は、建長寺において野菜の皮やヘタを無駄にしないよう発案された「建長汁」が語源であるともいわれており、このような食文化は、日本の生活文化に深く浸透している。



写真1-69 けんちん汁

### ウ 文学、映画

明治時代以降の鉄道開通により、都心の出版社からの交通利便性が確保されたことで、多くの文学者が古都の風情を有する鎌倉に住み始め、関東大震災以降は、壊滅的な被害を受けた東京から文学者の一部が鎌倉に移住して活発な文芸活動を展開するようになった。

また、戦後の鎌倉は日本映画界でも重要な地位を占めており、松竹大船撮影所における小津安二郎監督の作品制作は、日本映画に大きな影響を与えると同時に、海外から高い評価を得ている。現在も鎌倉を舞台とするテレビドラマ等が多く制作されており、鎌倉の風情や情緒を背景とした文芸活動の一端を示している。